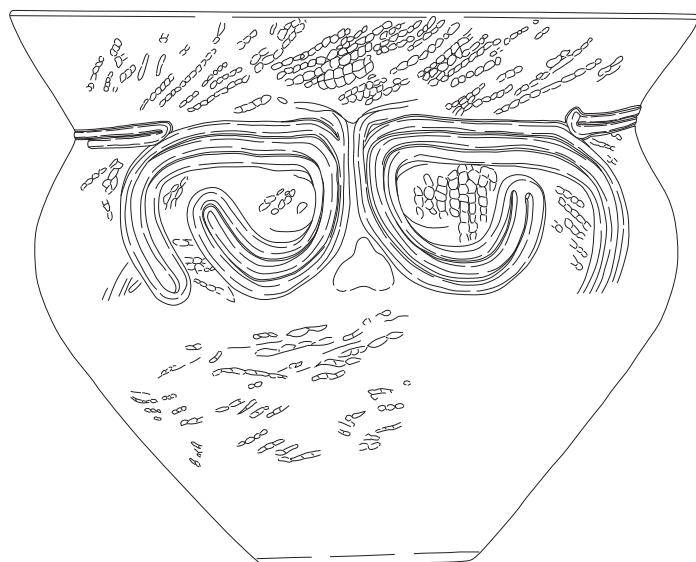


堀ノ内A遺跡

発掘調査報告書



2024

静岡市教育委員会

静岡市埋蔵文化財調査報告

堀ノ内A遺跡

発掘調査報告書

2024

静岡市教育委員会

例 言

- 1 この報告書は、静岡市駿河区小鹿1377-1に所在する堀ノ内A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、集合住宅建設工事に伴い、株式会社丹下不動産から委託を受け、静岡市教育委員会（観光交流文化局文化財課による補助執行）が調査主体となり実施した。
- 3 現地での発掘調査は、令和6（2024）年1月31日から令和6（2024）年3月15日まで実施した。調査面積は、125㎡である。
- 4 現地調査・出土資料の整理作業は以下の体制で行った。

調査担当者 菊田 宗（文化財課・主査）
黒澤 諒（同・主事）
渡井英誉（同・会計年度任用職員）

発掘作業員 柳瀬 勉、長谷川 豊、望月 貴之（同・会計年度任用職員）

図化作業員 酒井陽子（同・会計年度任用職員）
- 5 本書の編集は渡井、望月和美（同・会計年度任用職員）が行い、執筆については以下の分担で行った。

第1章 第1節 黒澤 諒

第2章 第3節 菊田 宗

上記以外 渡井英誉
- 6 出土資料の整理・図化作業については、天野志穂・河合澄野・小松澄美・後藤祥江（同・会計年度任用職員）の協力を仰いだ。
- 7 発掘調査にかかる資料は、発掘調査を示す記号「0230HR」を付して、静岡市観光交流文化局文化財課が管理している。
- 8 発掘調査にあたっては、株式会社丹下不動産より、文化財保護に対する多大なるご理解とご協力を賜った。
- 9 報告書の作成にあたり、以下の方にご教示、ご協力をいただいた。（敬称略）
新井正樹（静岡県考古学会・元静岡市文化財課）

凡 例

- 1 本書で用いる水準は標高、方位は真北（座標北）を示す。
- 2 本書で扱う調査区、遺構実測図等は、図ごとに縮尺を示した。
- 3 遺物実測図は、図ごとに縮尺を示した。土器は1/3、石器は1/4を基本としたが、一部異なるものもある。
- 4 掲載した写真の縮尺は任意である。
- 5 第1図については、静岡市地形図2,500分の1を使用して作成した。第4図については、国土地理院地図を使用して作成した。
- 6 遺構種別ごとに、以下の記号を付した。
SB：竪穴建物、SK：土坑、P：ピット

目 次

例言

凡例

目次	第1章	はじめに	
	第1節	調査に至る経緯	1
	第2節	調査の経過	2
	第2章	遺跡の立地と環境	
	第1節	地理的環境	4
	第2節	歴史的環境	5
	第3節	基本層序	6
	第3章	調査の成果	
	第1節	遺構	
		1. 1区	7
		2. 2区	10
	第2節	遺物	
		1. 土器	18
		2. 石器	20
	第4章	まとめ	32

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	調査区位置図	1
第2図	調査区全体図	3
第3図	静岡・清水平野地形図	4
第4図	周辺遺跡分布図	5
第5図	調査区基本層序	6
第6図	1区全体図	7
第7図	SK-01実測図	8
第8図	SK-02実測図	9
第9図	SK-02 埋甕実測図	9
第10図	2区南側全体図	11
第11図	SB-01実測図	12
第12図	SB-01 遺物出土状況全体図	13
第13図	SB-01 遺物出土状況（部分図①）	13
第14図	SB-01 遺物出土状況（部分図②）	14
第15図	SB-01 遺物出土状況（部分図③）	14
第16図	SB-01・P-1・P-2実測図	15
第17図	SB-01 埋甕1実測図	15
第18図	SB-01 埋甕2実測図	15
第19図	SB-02実測図	16
第20図	1区北側谷部実測図	17
第21図	遺物実測図（1）	21
第22図	遺物実測図（2）	22
第23図	遺物実測図（3）	23

第24図	遺物実測図（4）	24
第25図	遺物実測図（5）	25
第26図	遺物実測図（6）	26
第27図	遺物実測図（7）	27
第28図	遺物実測図（8）	28
第29図	令和4・5年度調査区平面図	33

挿表目次

第1表	出土土器観察表	29
第2表	出土石製品観察表	31

図版目次

図版1	遺構写真（1）
図版2	遺構写真（2）
図版3	遺構写真（3）
図版4	遺構写真（4）
図版5	遺構写真（5）
図版6	遺構写真（6）
図版7	遺物写真（1）
図版8	遺物写真（2）
図版9	遺物写真（3）
図版10	遺物写真（4）
図版11	遺物写真（5）
図版12	遺物写真（6）

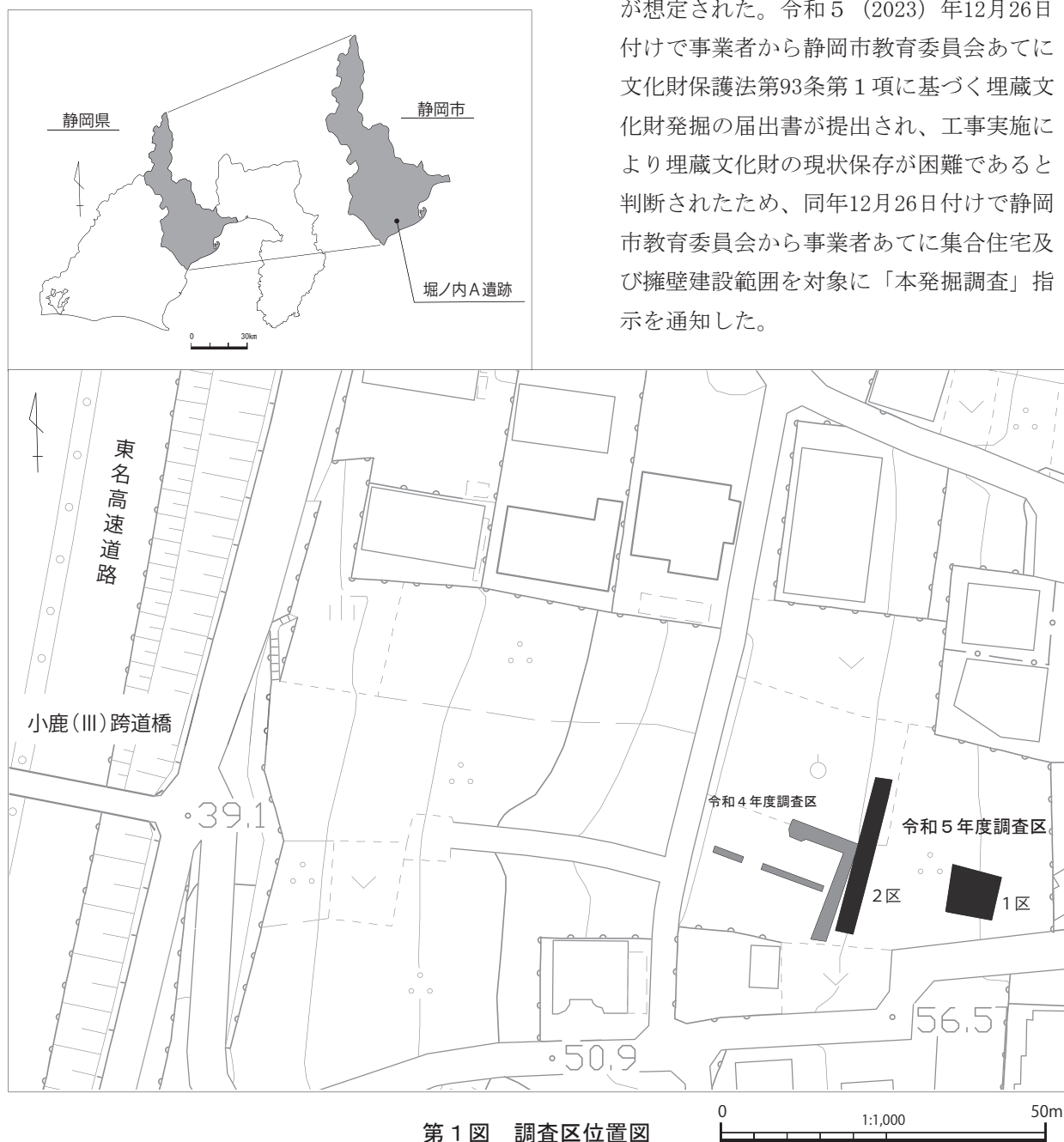
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

堀ノ内A遺跡は、有度丘陵の西側中腹部に広がる縄文時代の集落遺跡である。北側及び西側に向かって傾く海拔65m程を測る緩斜面地に位置する。地質的な基盤は、隆起を伴う扇状地堆積物で、径5～10cm程度の礫を多量に含む礫層が認められる。昭和5（1930）年に刊行された静岡縣史第1巻に紹介されているように、古くから縄文時代の遺物が採集される場所として知られており、今回の本発掘調査は3回目となる。

今回の発掘調査は遺跡南端の茶畑跡地での集合住宅建設に伴うものである。本発掘調査に先立ち、令和5（2023）年5月29日から令和5年6月7日に建設予定地で事前の確認調査を行った。調査の結果、埋蔵を伴う大型の土坑や縄文土器片を多く含む包含層などが確認され、対象地への遺構の広がりが

想定された。令和5（2023）年12月26日付けで事業者から静岡市教育委員会あてに文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出書が提出され、工事実施により埋蔵文化財の現状保存が困難であると判断されたため、同年12月26日付けで静岡市教育委員会から事業者あてに集合住宅及び擁壁建設範囲を対象に「本発掘調査」指示を通知した。

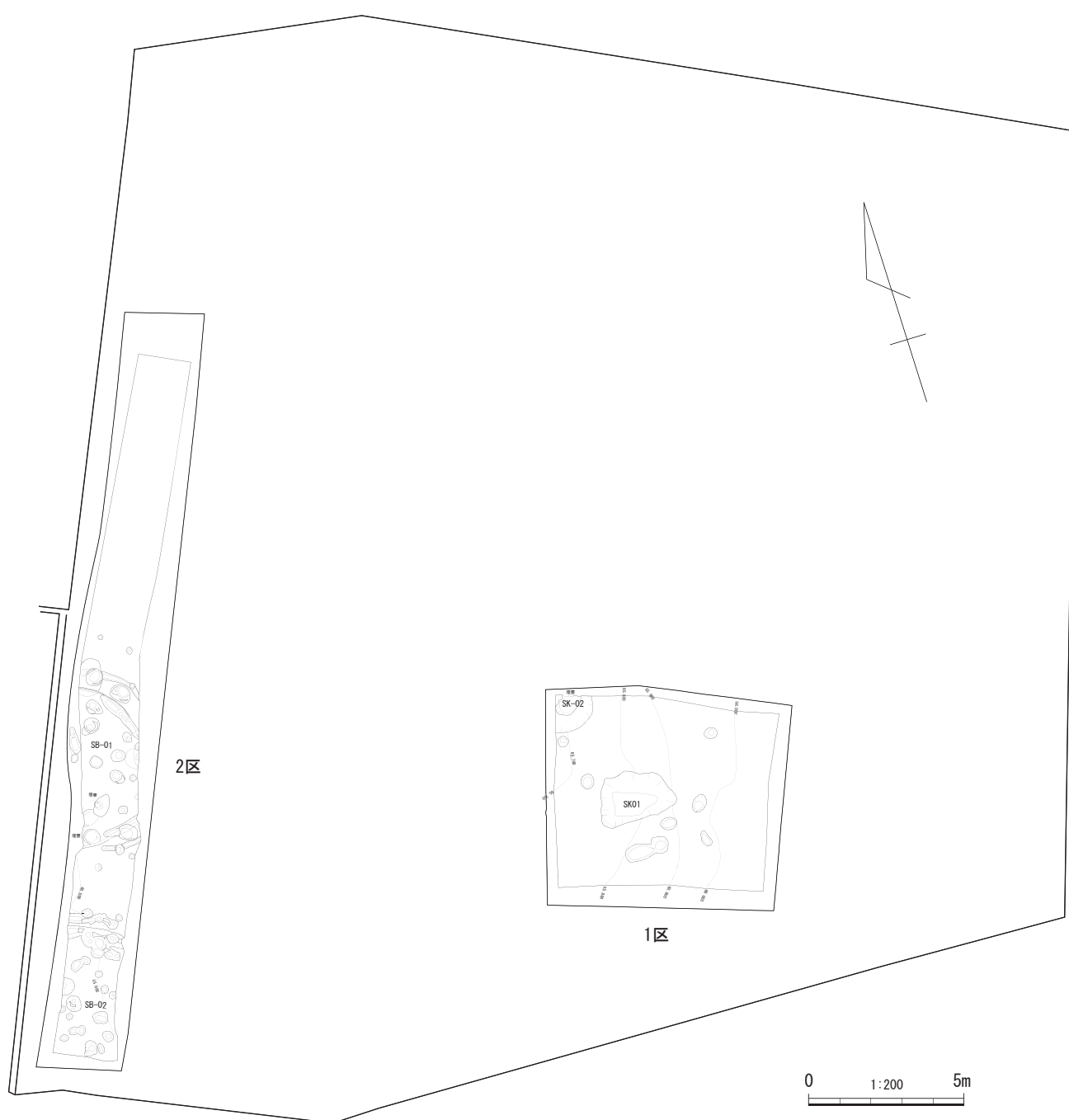


第2節 調査の経過

現地における発掘調査は、令和6（2024）年1月31日（水）より開始し、3月15日（金）まで実施した。以下に主な調査の経過を記載する。

- | | |
|----------|--|
| 1月31日（水） | 第1区・第2区の調査区設定とともに、重機による表土排除作業及び遺構の確認作業を実施する。第1区の調査区中央において竪穴状の落ち込みを確認した。また、第2区北側が大きく落ち込む埋没谷であることが明らかになった。第2区は南北に長い調査であることを考慮して、便宜的に2-A区、2-B区、2-C区に分割して調査を進めた。 |
| 2月1日（木） | 第2区中央の竪穴遺構は、幅5m程の円形の平面形を示すものであった。SB-01とする。 |
| 2月2日（金） | 第2区遺構確認、1区SK-01確認。
第2区北側の谷部調査を行う。覆土中から縄文土器の出土が認められた。 |
| 2月6日（火） | 第1区遺構確認。
SK-01は、長軸1.5mを測る不整円形の土坑であることが明らかになった。その周辺にピットが広がる。 |
| 2月7日（水） | 第1区遺構確認。 |
| 2月8日（木） | 第2区SB-01調査開始、第1区SK-01調査開始。 |
| 2月9日（金） | SB-01覆土排除、SK-01覆土排除。 |
| 2月12日（月） | SB-01覆土排除、SK-01覆土排除。 |
| 2月13日（火） | SB-01覆土排除、SK-01覆土排除。 |
| 2月14日（水） | SB-01覆土排除、SK-01土層断面図作成、SK-02覆土排除。
第1区の北西隅で確認された落ち込みをSK-02とした。覆土排除に伴い北東隅で埋甕が出土した。 |
| 2月15日（木） | SB-01覆土排除、SK-01土層断面図作成、SK-02覆土排除。 |
| 2月16日（金） | SB-01土層断面図作成、SK-01土坑底面調査、SK-02遺物出土状況調査。
SB-01では竪穴建物に関わるピットを遺構の内外において調査を行った。 |
| 2月20日（火） | SB-01遺物出土調査、SK-02遺物出土調査、床面調査。 |
| 2月21日（水） | SB-01遺物出土調査、SK-02遺物出土調査、床面調査。SK-01堆積土層観察及び記録作業。 |
| 2月26日（月） | SB-01遺物出土調査、SK-01掘り上がり。 |
| 2月27日（火） | SB-01遺物出土調査、SK-02土層断面図作成。
SB-01では、床面に広がる遺物出土状況図を作成する。 |
| 2月28日（水） | SB-01遺物出土調査、SK-02土層断面図作成。 |
| 2月29日（木） | SB-01遺物出土調査、第1区平面図作成。 |
| 3月1日（金） | SB-01遺物出土調査、第1区平面図作成。
SB-01で、柱穴等になる関連遺構調査、埋甕確認。 |
| 3月4日（月） | SB-01で、柱穴等になる関連遺構調査、埋甕確認及び記録作業。 |
| 3月5日（火） | 第2区南側ピット群調査、北側谷部調査。 |
| 3月7日（木） | SB-01埋甕及び関連遺構調査、第2区南側ピット群調査、平面図作成、北側谷部調査。 |
| 3月8日（金） | SB-01埋甕及び関連遺構調査、第2区南側ピット群調査、平面図作成、北側 |

- 谷部調査。
- 3月11日（月） SB-01埋甕及び関連遺構調査、第2区南側ピット群調査、平面図作成、北側谷部調査。
- 3月13日（木） SB-01埋甕調査、SK-02埋甕調査。
- SB-01の埋甕は並列して2基設置されていた。壁周溝についても2重に巡ることが明らかになった。建物の建て替えがおこなわれたものと考えられた。
- 3月14日（木） SB-01埋甕調査、調査区埋め戻し。
- 3月15日（金） 調査終了、器材撤収。



第2図 調査区全体図

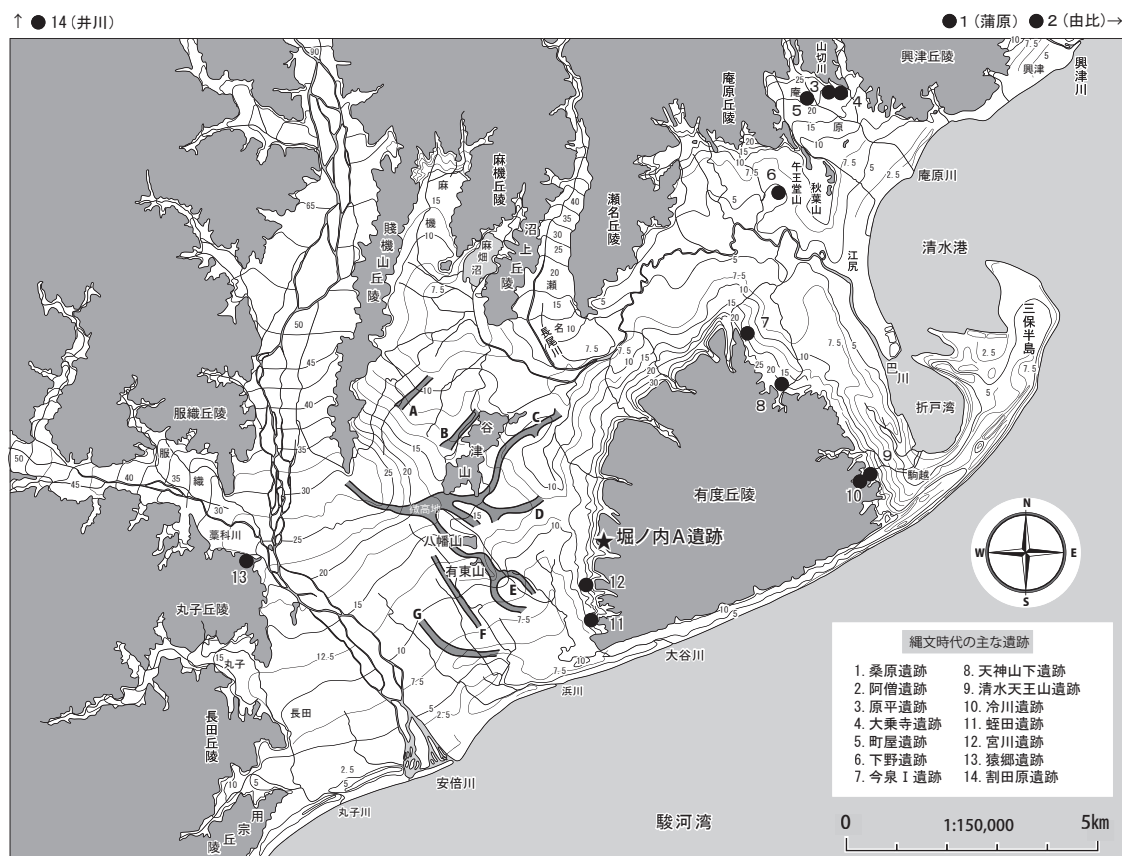
第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

静岡市は、その北側のほとんどが赤石山地であり、南側に広大な太平洋を望む地形環境にある。現在の市街地となる範囲は、安倍川や巴川的作用による沖積平野がその主な部分を占める。北側に南アルプスとなる山地が聳え、南側は、いくつもの河川の流れが見られる静岡・清水平野となっている。静岡・清水平野の南側には、広大な独立丘陵で海まで及ぶ有度丘陵が広がる。有度丘陵は、かつての安倍川の河口に広がる扇状地の一部がドーム状に隆起した丘陵で、海拔高307m、幅5kmを測る。これは、静岡・清水平野中央にある谷津山などの沈降山地である独立丘陵とは、その形成を違える。有度山は、最下位のシルト岩を主に含有する根古屋層と、それを覆う礫岩層を基盤とする更新世の丘陵である。丘陵は、約10万年以前から隆起して現在の地形となったもので、海岸線に沿う南側が直線的となるかまぼこ型の丘陵は、その南側から東側一帯で海蝕による侵食が進行する。北側から西側では、丘陵は緩やかに傾斜して平野部へと続き、静岡・清水平野を横断する巴川の支流である大沢川、草薙川、吉田川等が北へ向かって流れている。また、丘陵の西側沿いを南流する大谷川へと、長沢川や小鹿沢川等が流れ込む。

縄文時代早期からの温暖期に伴い海進が始まり、6,000年ほど前の縄文時代前期にそのピークを迎え、縄文時代後期に向かって海退が進行し、陸地化により平野部が形成されていく。陸地化した平野部へ丘陵部から幾筋かの小河川が流れ込むことになる。

有度丘陵の裾部も、小河川の流出による開析谷が形成され、舌状に延びる小さな丘陵が発達する。今回の調査は、その中の小鹿原と呼ばれる舌状台地上にのる堀ノ内A遺跡が対象である。



静岡市教育委員会2014『鷹ノ道遺跡第14次調査報告書』掲載図を改変

第3図 静岡・清水平野地形図

第2節 歴史的環境

静岡市の先史・古代に関わる遺跡としては、旧石器時代の尖頭器未成品や搔器、縄文時代早期の撚糸文土器が見つかった庵原の町屋遺跡が最も古い事例となる。但し、沖積地内での遺物の出土で、遺跡として原位置を表しているかは、はっきりしたものではない。有度丘陵では、西麓にある宮川遺跡で縄文時代早期の押型文土器と石器が出土しており、静岡平野における遺跡の始まりを表している。

静岡市の縄文時代の遺跡は、偏った分布を示す。集落遺跡である縄文時代中期の割田原遺跡は、狩猟採集へ依存した典型的な集落で井川地域に展開する。それは出土遺物にも如実に表れ、長野や山梨の土器の影響を受けたものが多い。同じく縄文時代中期の集落である阿僧遺跡や桑原遺跡は、海を見下ろす丘陵に築かれ、海に関わる集落の形成が窺われる。縄文時代晩期の代表的な遺跡である清水天王山遺跡、冷川遺跡は、有度丘陵の東側裾部という限定的な地域に分布する。それらは、現在の折戸湾に近接しており、阿僧遺跡などより、さらに「海」への関わりの高さを示している。

また、有度丘陵の西側から北側にかけては、丘陵裾部の舌状台地に縄文時代の遺跡が広がる。ここには、縄文時代中期の今泉Ⅰ遺跡や堀ノ内A遺跡が分布する。有度丘陵の遺跡は、丘陵内やその眼下の海への関わりによる多彩な生業を糧としていたと思われるが、そこには海を介した他地域との交流が指摘される。中部高地など東日本一帯に広がる土器とともに、西日本に関わる土器が多く出土している。有度山の西麓においては、蛭田遺跡など沖積地をその生活域とする集落が見られる。居住地は、丘陵上にあったのかもしれないが、生活圏を沖積地まで広げており、「海」を意識した遺跡の分布とともに静岡市における大きな特徴のひとつとなっている。縄文時代中期以降の巴川流域の中心とした陸



第4図 周辺遺跡分布図

地化の進行は、その開発を大きく進展させた。下野遺跡から出土した漆塗りの櫛の発見は、それを象徴しているものと思われる。

このように遺跡の分布は、地形環境により大きく異なり、特に縄文時代遺跡の分布には、それが明確に反映されている。そして、中部高地の影響が濃い割田原遺跡、水晒し場が検出された蛭田遺跡、沖積地にある下野遺跡など、様々な性格をもつ遺跡を生み出す要因となっている。

縄文時代の遺跡として登録されている堀ノ内A遺跡は、その南側で小鹿古墳群の分布範囲と隣接、あるいは一部重複している。小鹿古墳群は、小鹿原と小谷戸を挟んで南に広がる小鹿丘陵を主体として分布する群集墳である。有度山西麓では、古墳時代中期から後期の古墳や横穴が数多く築かれている。池田山古墳群、静岡大学校内古墳群、宮川古墳群、石原窪古墳群、井庄段古墳群、井庄谷横穴群などがある。小鹿古墳群では、これまでに24基の古墳が確認されている。

有度山西麓の山裾にあたる大谷、宮川地区では8世紀になると、駿河国分寺と目される片山廃寺跡が建立される。

第3節 基本層序

令和4（2022）年に西隣の敷地で調査を実施しており、その際に使用した層序を今回の調査でも踏襲した。自然堆積の土層である基本層序は大きく4層に分けられる。

第Ⅰ層 暗褐色土層（表土・耕作土） 畑の耕作土で、Ⅱ層以下に比べ締まりは弱く、粒子は粗い。

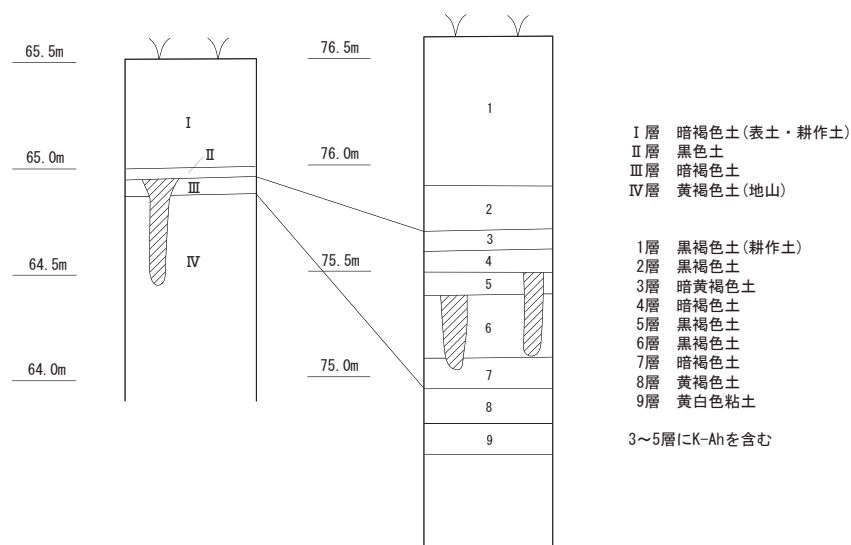
第Ⅱ層 黒色土層 粒子は細かく、粘性は普通～ややありで若干締まる。一般的に「黒ボク土」と呼ばれるもので、二つの生成要因を持つものの内、腐植集積作用に由来する黒ボク土である。本丘陵北側の東原ノ坪遺跡で本層中にカワゴ平軽石（kgp）2,800年前約－2,900年前の降灰層準が確認されている。

第Ⅲ層 暗褐色土層 第Ⅳ層から第Ⅱ層への漸移層で、締まり粘性ともに強い。平成12（2000）年1月に実施した当遺跡の調査や、本丘陵北側の東原ノ坪遺跡では、本層に対応する土層内から鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）約6,300年前の降灰層準が確認されている。

第Ⅳ層 黄褐色土層 締まりと粘性ともに強く、部分的に円礫（径100mm以下）や砂粒が見られる。堀ノ内A遺跡内でも砂の含有量は一定しない。東原ノ坪遺跡ではⅣ層上面から約70cm下で始良火山灰（AT）約2.2－2.5万年前の降灰層準が確認されている。

今回の調査区における

縄文時代の遺構は、第Ⅲ層上面を掘り込み面としている。遺構の検出に際しては、遺構確認面を第Ⅲ層上面とすると遺構の見落としが非常に多いため、今回の調査では、第Ⅲ層下位から第Ⅳ層上面で遺構検出を試みている。



第5図 調査区基本層序

第3章 調査の成果

第1節 遺構

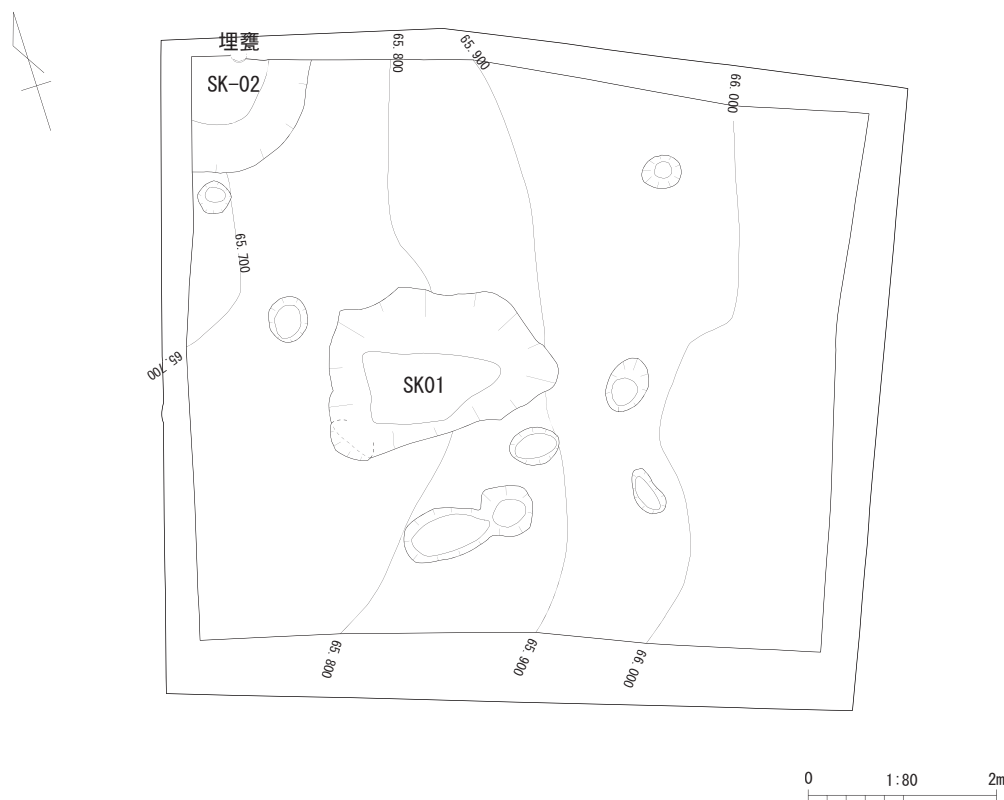
1.1区 (第6図)

SK-01 1区の中央付近で検出された土坑で、東西方向に長く、長軸225cm、短軸138cmを測る。西側が直線的で東側が尖る不整の三角形となる。西辺は長さ150cmとなる(第7図)。南側は東側の頂点に向かって直線的であるが、北側はやや方形を指向して西側から直角気味に曲がる。底面は東側に頂点を持つが、西側、北側、南側が不整形ながら方形となる。底面は、遺跡の地形に合わせて南東方向へ傾斜し、確認面より最深で深さ49cmを測る。壁は、南側が直立気味に立ち上がり、北側は緩やかな立ち上りを示す。

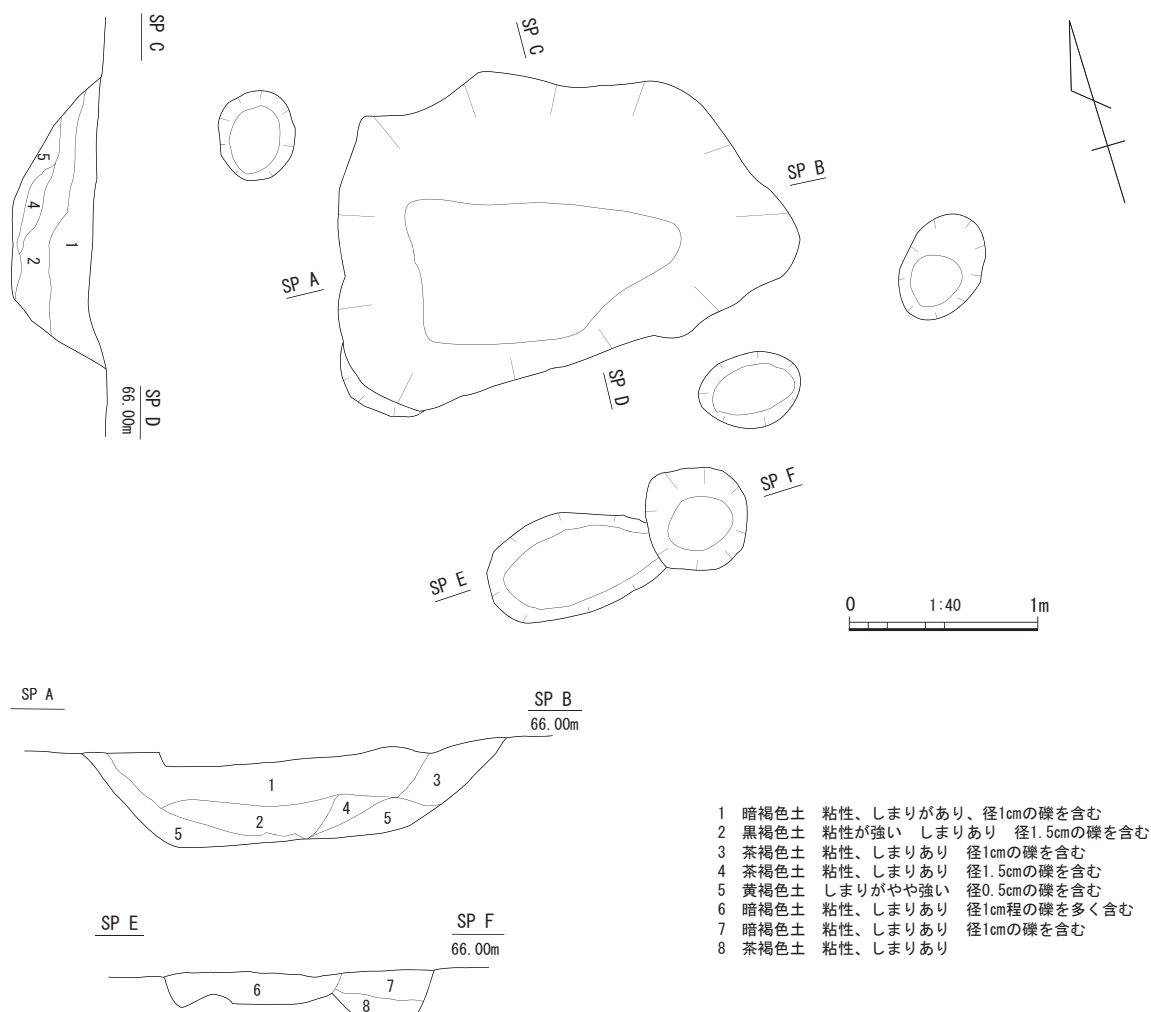
断面形は船底状となる。覆土は、黄褐色土の第5層に黒褐色土の第2層が覆い、類似する黒褐色の第1層がその上を覆う。それらは、ほぼ水平堆積となり、それぞれの間にブロック状の第3層、第4層が挟まれていた。その堆積状況から人為的な埋め土ではなかったかと判断される。

覆土の状況や長軸の長さなどから、墓としての土坑を想定する。遺構の性格を反映して、遺物の出土はほとんど見られなかった。

SK-01の周辺には、その南側を中心に4個の円形、楕円形のピットが分布していた。いずれも径45～65cm、深さ20cmを示すものであった。また、SK-01の南辺に並行するかのように、円形のピットと重複して長楕円の土坑が見つかった。幅55cm、長さ95cm、深さ16cmを測る。



第6図 1区 全体図



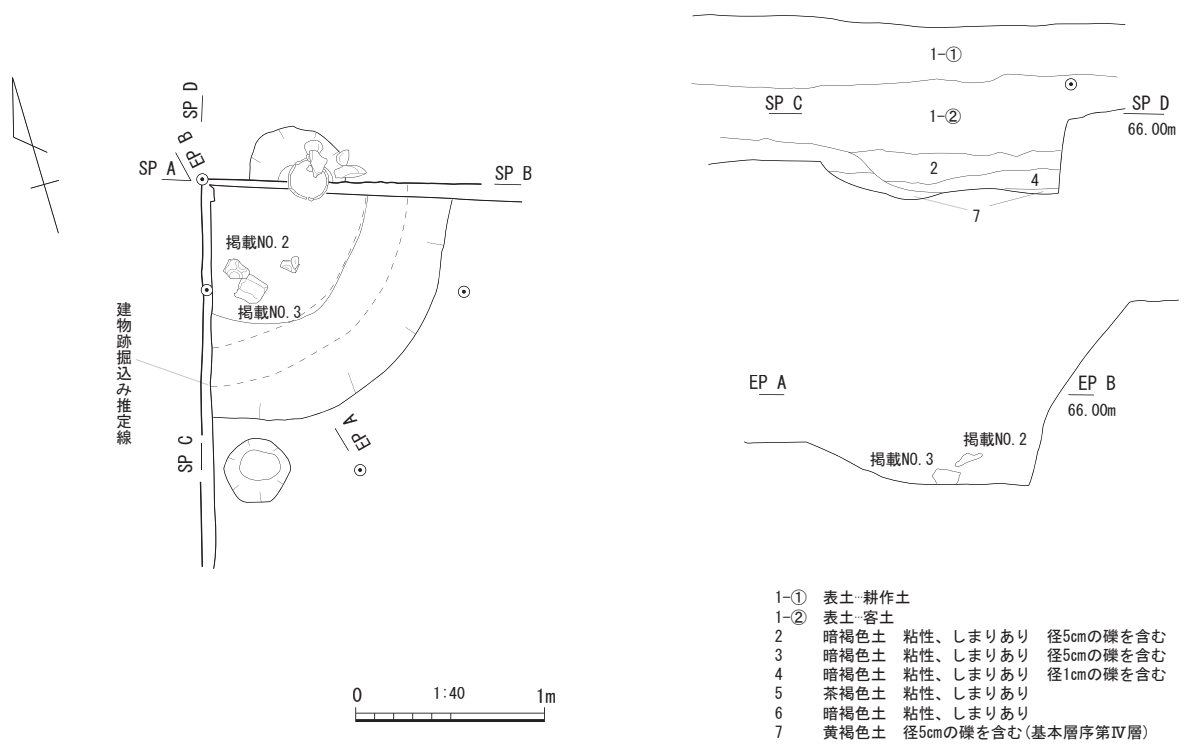
第7図 SK-01 実測図

SK-02 1区の北西隅で出土した落ち込みで、土坑SK-02とした。その大半は調査区域外へ広がる。限定的な調査により地山とした礫混じりの黄褐色土（第7層）を含めて遺構掘削を行い、断面による土層観察よりその形態が明らかとなった（第8図）。推定される平面形は扇形で、北東側が僅かに直線を指向するものとなる。掘り込みの深さは、確認面より20cmを測り、壁は緩やかに外方へ立ち上がる。覆土は、北東側に見られる壁際の三角堆積を含めて3層に分層され、地形に対応して、東から西へ流れ込んでいるような状況であり、覆土上層の暗褐色土（第2層）が層厚をやや厚くしている。床面はほぼ平坦で、貼り床や周溝等は確認されなかった。SK-02からは、北東側で第21図No.1として掲載した埋甕が出土しており、南東隅に埋甕を埋設する竪穴建物と捉えた。

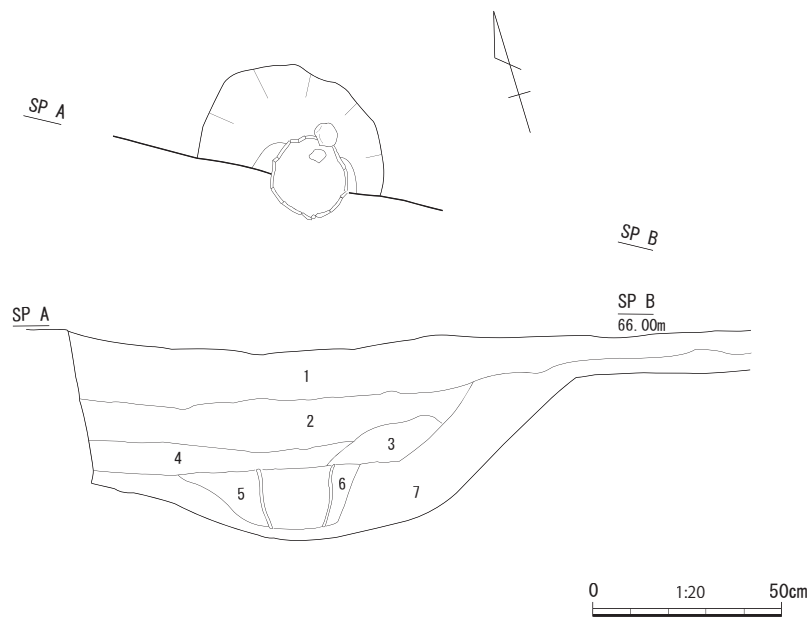
埋甕は、胴下半と口縁端部を欠損する甕（鉢）が調査区の壁際で発見されたもので、直径50cm、深さ16cmを測る円形の掘り方内でその周辺を暗褐色土や茶褐色土で埋めていた（第9図）。

SK-02の南側には、10cm程の間隔を開けてピットが穿たれていた。ピットは、径34cmの円形の平面形で、深さ20cmを測った。

遺物は、この埋甕の他に床面より台石の破片や土器片等の出土が確認されている。



第8図 SK-02 実測図



第9図 SK-02 埋甕実測図

2. 2 区（第10図）

SB-01 2区のほぼ中央において確認された堅穴建物で、2軒の建物が重複する（第11図）。いずれも壁周溝を伴い、それぞれに埋甕が付属する。埋甕の型式や堅穴建物内の各施設の状況などにより、建て替え等によるものではないかと判断した。令和4（2022）年度に実施した隣接の調査によって発見された石囲い炉は、この堅穴建物の炉となるのが今回の調査で明らかになったが、この2軒に対して、炉の作り替えは行われておらず、共有するものとなる。全体の平面形は明らかではないが、円形となるのではないかと考える外側の堅穴建物（SB-01①）と、各辺に直線的な部分が認められ、多角形となる可能性のある内側のそれ（SB-01②）とに分けられる。

SB-01①は、調査区域内の南西隅以外において壁周溝の存在が確認されている堅穴建物で、半径3m程度の大きさが想定される。周溝は、幅20cm、深さ10cmを測る。堅穴の掘り込みが浅く、壁は残存していなかった。P-2としたピットに関わる床面と堅穴建物の南北で対照となるP-3周辺の床面は海拔は65m程度で同じ高さを示す。対してそれぞれの内側は、底面が10cm程度深くなる堅穴建物SB-01②が広がる。

堅穴建物の南隅部分で埋甕が発見されている（第17図）。埋甕は、正位の状態で口縁部から胴部上半を残して埋め、破片化した胴部下半を入れ子状としていた（第22図No.13）。底部から胴部の一部、口縁部の一部が欠損していたが、特に、底部は綺麗に穿たれていた。埋甕に伴う掘り方は、56cm×48cmの楕円形で、深さ32cmを測る。底面は中央がやや窪む。覆土は、暗褐色土と明黄褐色土との互層をなし、人為的に埋められていた。掘り方は、SB-01②を対象とした調査での確認であったことからSB-01①の床面の高さに相関していないが、本来は、その掘り込みが10cmほど高かったことになる。

SB-01②に関わる埋甕は、建物の南端部から80cmほど内側に埋設されたもので、南北に長75cm×48cmを測る掘り方を築成する（第18図）。不整形の掘り方に対してその北寄りに直接埋甕を設置する土坑を築く。径25cmの円形の形状で、深さ20cmを測る。甕は、底部と口縁端部を欠くもので正位に置かれ、高さ18cmを測る（第21図No.5）。

SB-01で確認されているピットは、それぞれの建物に関連しているものと思われるが、重複関係やそれぞれの覆土等からいずれに関わるか判断することは難しい。SB-01①に関わると思われるP-1とP-2については、いずれもその覆土中に多量の自然石とともに土器片や、P-1においては磨製石斧（第24図No.37）の破片、P-2においては石器素材となる硬質砂岩の破片などが出土した（第16図）。ピットの埋まった状況は、建物廃絶時の埋め戻し行為を反映しているものであった。SB-01においては、建物の建て替えが行われ、北側部分では、恐らく柱穴に対応するものと思われるピットの埋め戻しが行われたものと思われる。同様のことは、SB-01の南側にあるP-3においても指摘されることで、建物の周辺にやや大型のピットを築いていたことになる。P-1は、径57cmを測るほぼ円形のピットで深さ61cmを測る。覆土（埋土）は、礫や土器片を含む黒灰色土と暗灰褐色土がその多くを占める。P-2は、P-1の南側に穿たれた68cm×58cmの大きさの楕円形のピットで深さ54cmを測る。覆土は礫、土器混じりの黒灰色土がその大半を示し、意図的に埋められていた。建物の周囲にあるこれらのピットは、その規模や形状が類似するものであるが、それは、埋甕に関わる掘り方との関連においても指摘されるものとなる。

堅穴内で確認されたピットについては、柱穴となるものがいくつかある。但し、限定的に捉えることができる事例は明らかではない。また、2軒の堅穴建物の重複とした場合、それぞれの帰属を確定することも明確にはできない。隣接するP-4とP-5やP-6とP-7などは、それに関わる可能性がある。P-4は56cm×42cmの楕円形の平面で、深さ36cmを測る。穴の底面は北東側に片寄り、南東側で段を形成する。覆土は、レンズ状の自然堆積で3層に分層される。対して、P-5は、径42cmの円形で深さ33cmを

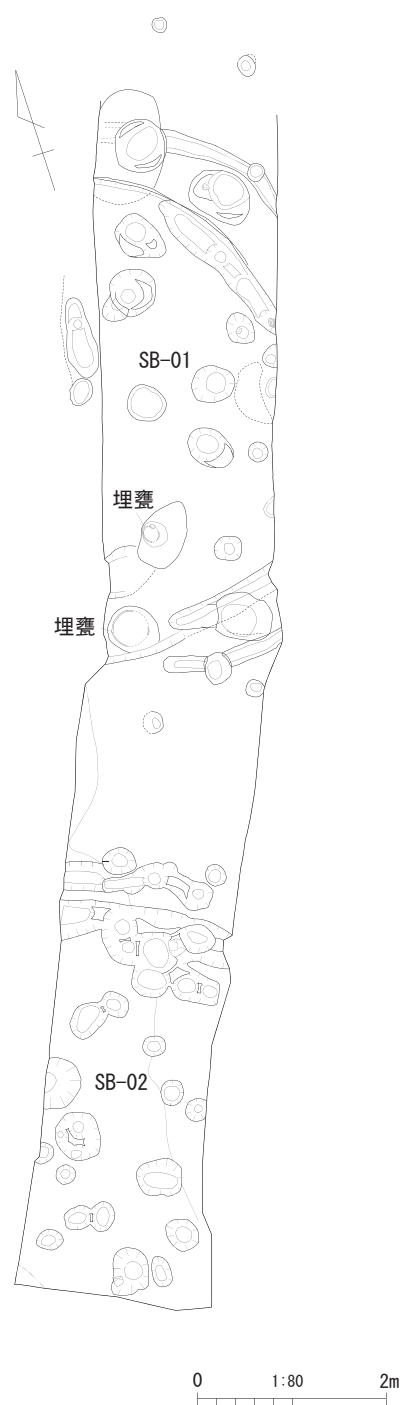
測る。南西側に幅18cm、深さ7cmを測る張り出し部が認められる。覆土中に意図的に埋め戻したブロック状の堆積土と自然堆積と思われる堆積土が混在していた。柱穴で柱自体を抜き出したのではないかと考えられる。ピット上部張り出しは、柱の抜き痕に関連するのかもしれない。このことからP-5がSB-01①に関わり、P-4がSB-01②に関わることが想定される。

P-6は、46cm×38cmの楕円の平面で、深さ30cmを測る。覆土は2層に分層される。P-7は、径40cmの円形で、深さ24cmを測る。南東側に幅14cm、深さ5cm程の張り出しが認められる。これらが柱の抜き痕に関わるものとなると、P-7がSB-01①、P-6がSB-01②のものとして考えられる。

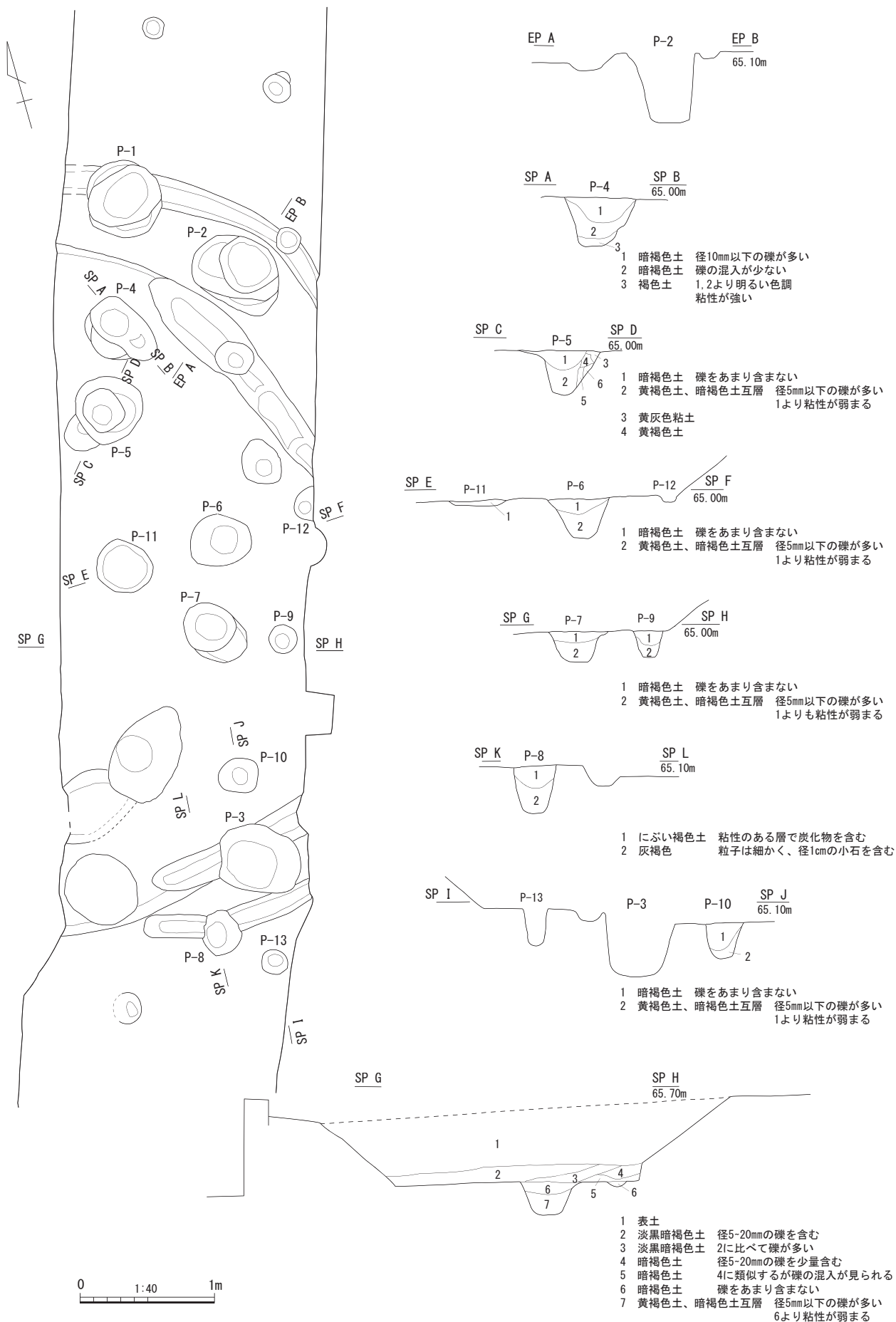
SB-01の周りには、それに沿うように小ピットが確認されている。北側は、SB-01の周溝から90cm～105cmの距離に、径16cm、深さ20cmのものと、径22cm、深さ17cmを測る2つのピットが点在する。南側ではその間隔を狭め30cm～50cmで径24cm、深さ26cm、径20cm、深さ28cmを測るピットが2つ確認されている。

遺物は、埋甕とP-1・P-2出土のもの以外全てSB-01②に関わるものとなる（第12図）。竪穴建物の掘り込みの残りが浅く出土層位から帰属と年代は判断しきれない。また、後世の土地の削平により、竪穴建物自体大きな影響を受けているが、遺物に対しても同様である。SB-01②の南西側の床面で発見された鉢（第21図No.6）は、横位で半身を消失していた（第13図）。また、同じく中央西寄りで見つかった鉢の底部（第23図No.15）は、床面において正位の状態での出土で、胴部以上の大半を消失していた（第14図）。また、遺物は、台石とした大型礫が破片化した状態で、5個床面で確認されている（第12図・第15図）。それらは、竪穴の南東側にやや集中する状態で出土している。この内の1つは、SB-01②の南東隅で周溝内に落ち込むような状態となっていた。住居の廃絶時の最終段階において遺棄されたと捉えられる。

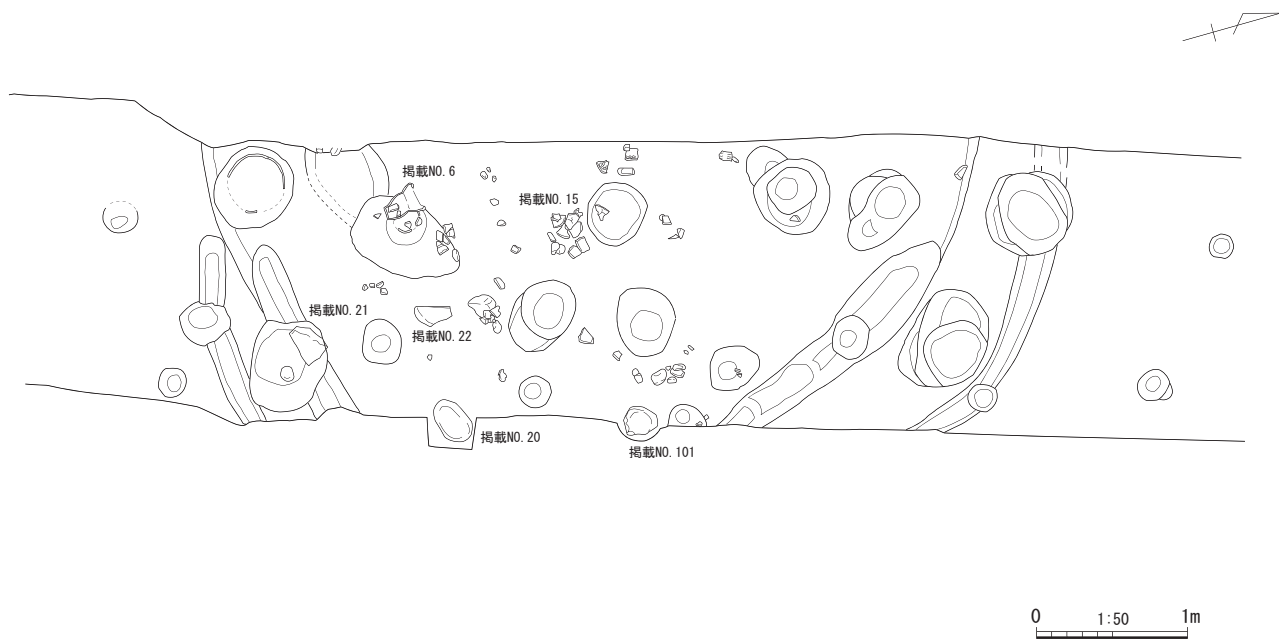
SB-01①の埋甕は曾利Ⅱ式である。対してSB-01②の埋甕は、残存状態があまりよくないことなどから明確な型式設定はできないが、頸部に連弧状沈線が施された東海系土器と考えられる。SB-01②の床面から出土している深鉢（No.6）は曾利Ⅱ式の新しい段階（Ⅱb）のものである。SB-01は、曾利Ⅱ式期の中で考えられる。



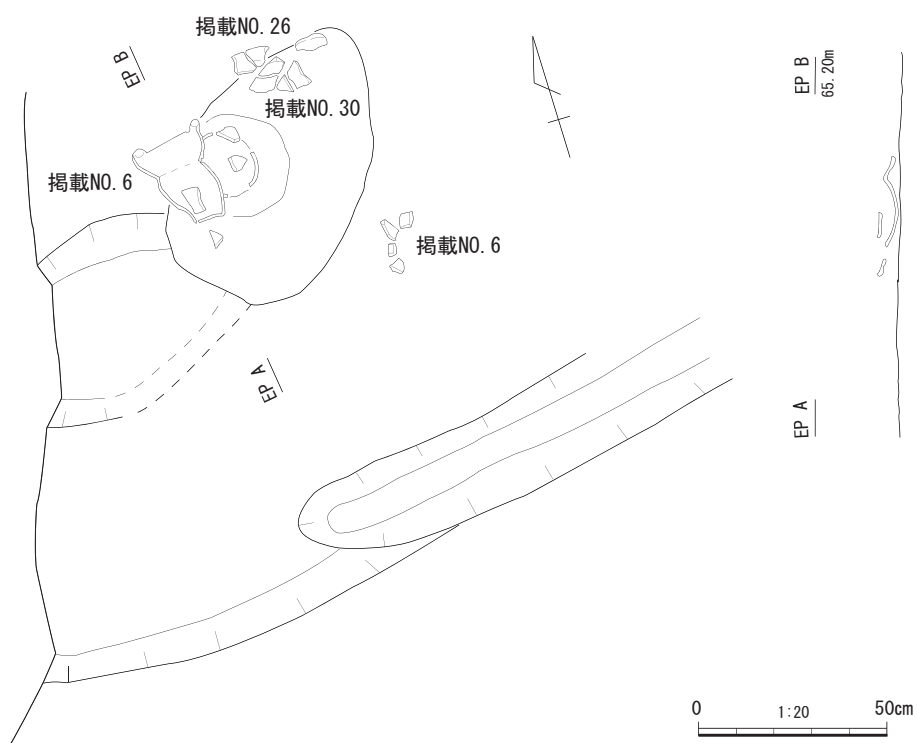
第10図 2区 南側全体図



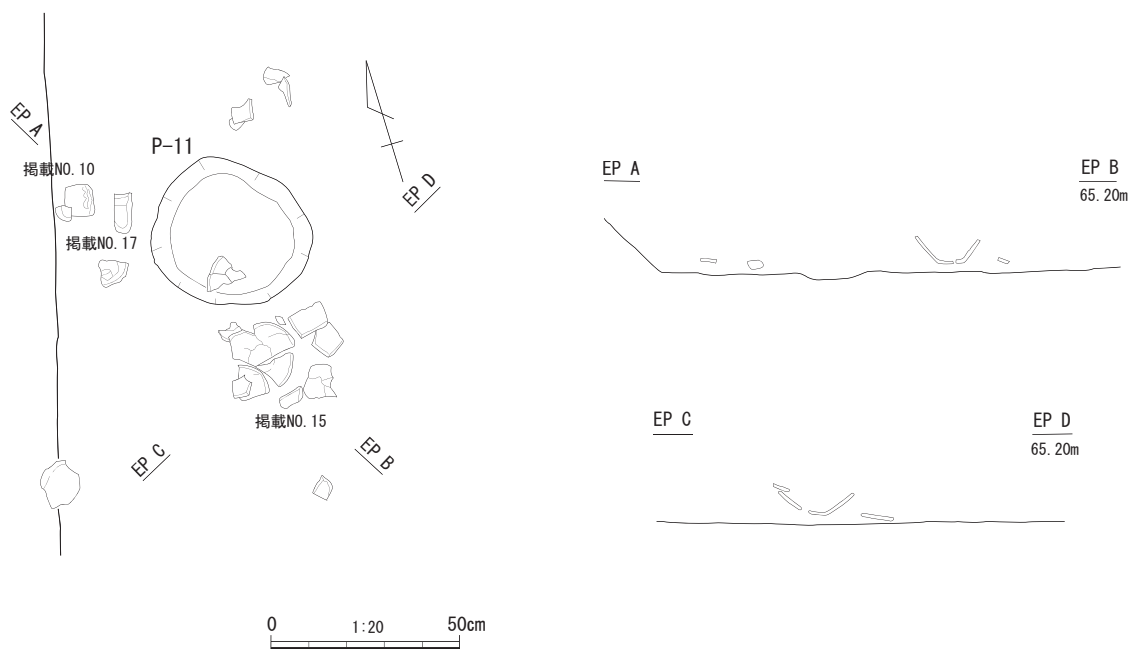
第11図 SB-01 実測図



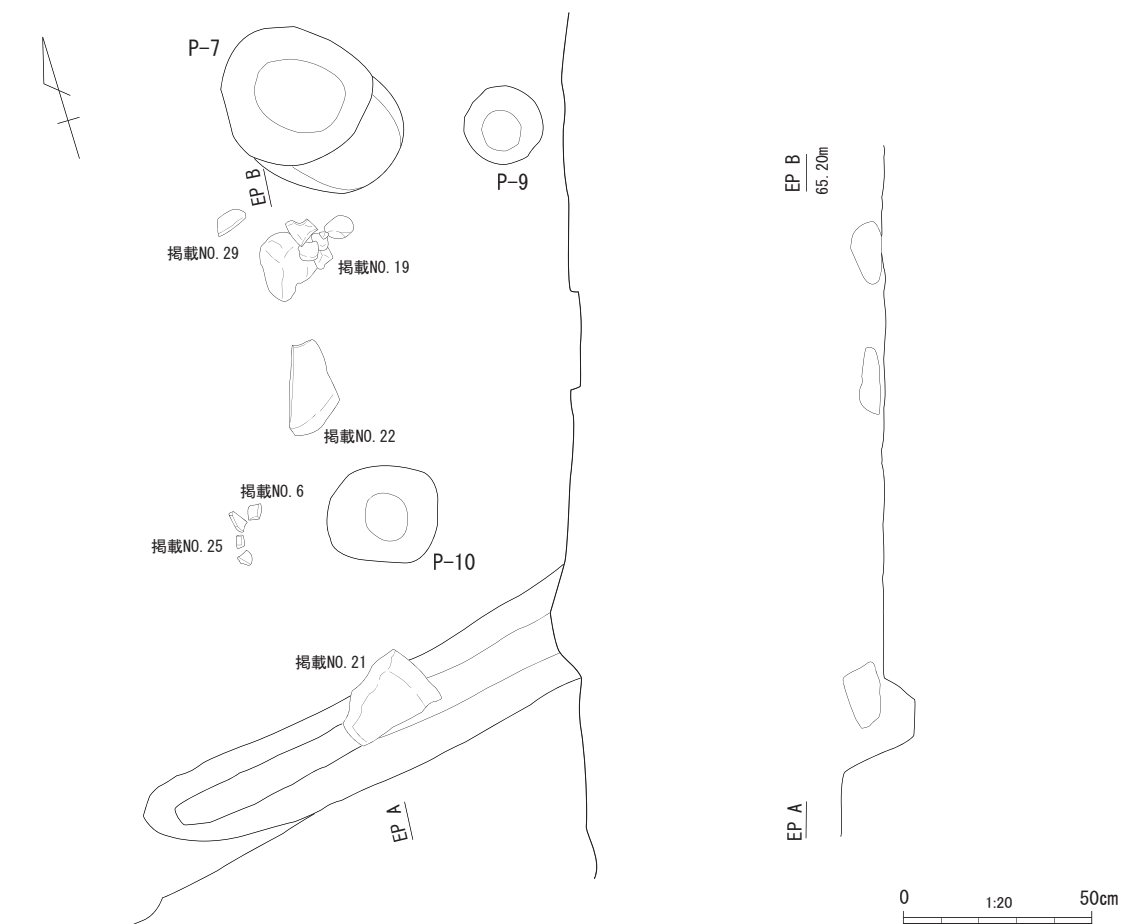
第12図 SB-01 遺物出土状況全体図



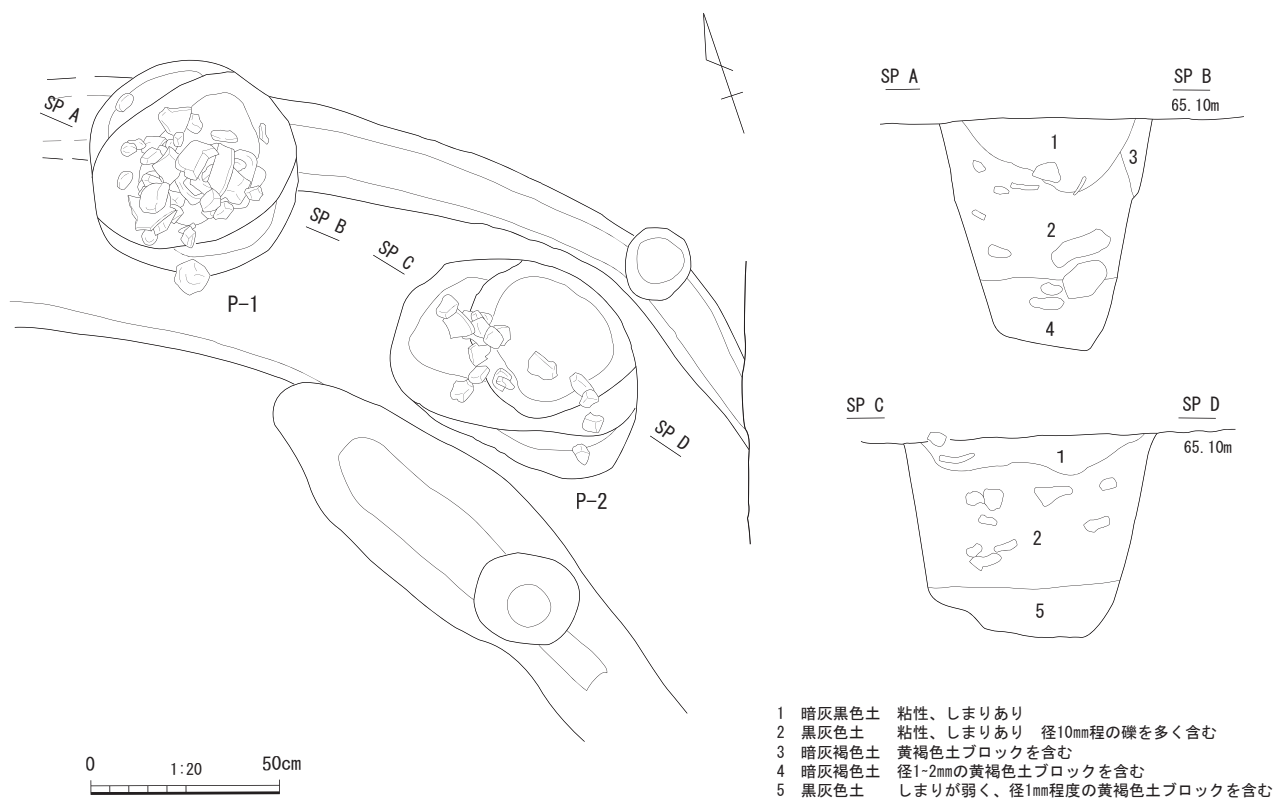
第13 図 SB-01 遺物出土状況（部分図①）



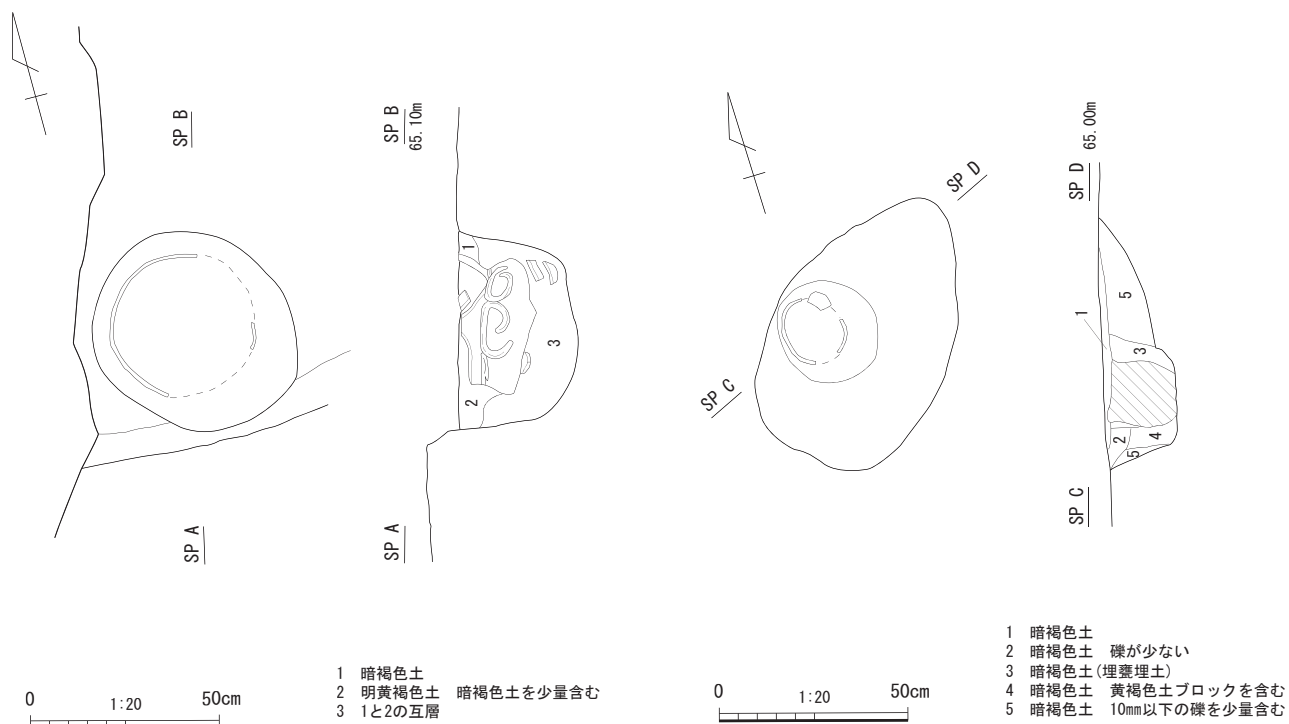
第14図 SB-01 遺物出土状況（部分図②）



第15図 SB-01 遺物出土状況（部分図③）



第16図 SB-01 P-1 P-2 実測図



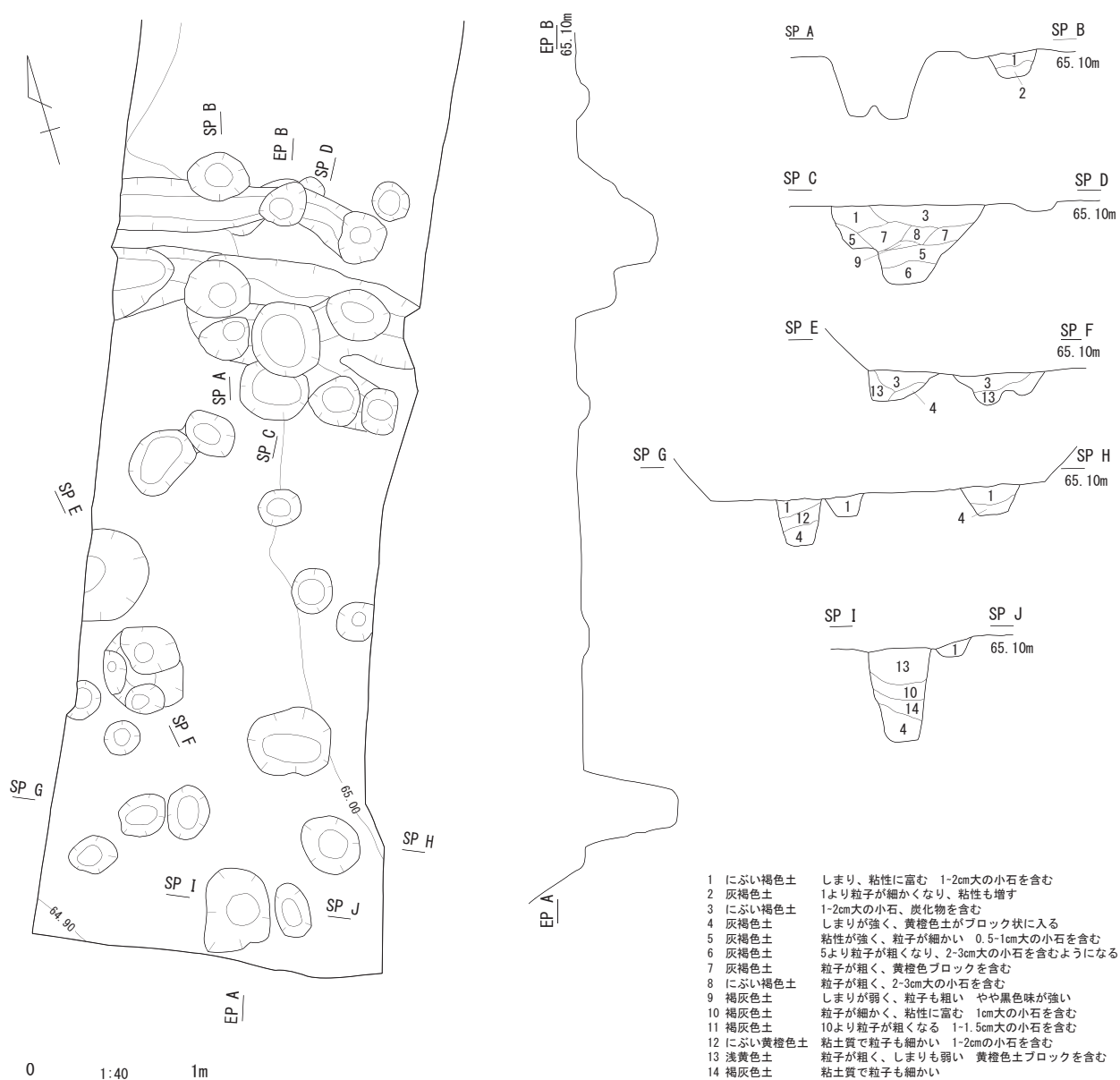
第17図 SB-01 埋甕 1 実測図

第18図 SB-01 埋甕 2 実測図

SB-02 2区南側で確認されたピット群をSB-02とする。炉跡や埋甕などは発見されていないが、SB-01と幅1.2mの遺構の空白域をもってピットの群集域を形成することや、壁周溝と思われる溝が東西方向に走る点等から人為的な工作物としての建物跡とした（第19図）。

SB-02の北端には、弧を描く2条の溝が巡るような状況が見て取れる。外側は幅20cm、深さ5cmを測る。調査区の東側で消失しており、全周するものとはならないようである。内側の溝として認識される部分は、幅40cm、深さ35cmであるが、その多くは規則性のないピット群と重複して形状は明らかにできない。ここに見られる大小様々のピットは、最深で深さ45cmを測り、覆土の堆積状況から木根に関わったものと考えられ、その西側は、単独のピットを巻き込むような状況を示す。

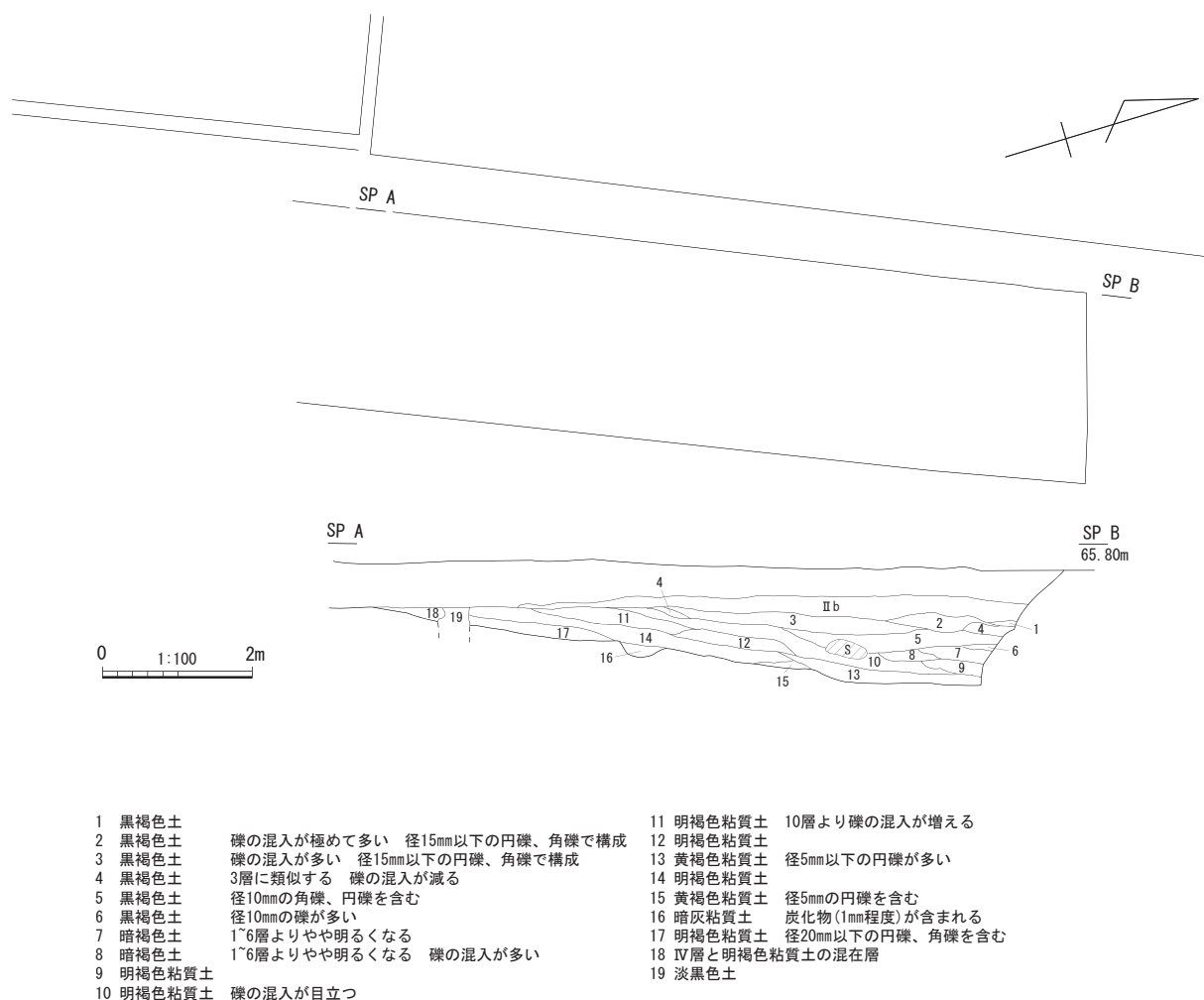
SB-02とした範囲は、遺構確認面で5cm程度の比高差を示しており、後世の削平等の影響を受け遺構としての残存状態は悪い。確認されているピットも10～20cmのものがその大半を占める。その中でトレンチ南端中央のピット（P-1）が幅50cm、深さ54cmを測る。また、その北西側の1基（P-2）が径28cm、深さ28cmとなり、それぞれやや深くなる。また、深さ16cmを測る西側中央のピット（P-3）は、半分以上が調査区域外に広がるものであるが、径55cmを測り規模を大きくする。



第19図 SB-02 実測図

埋没谷 第2区の北側で埋没谷を確認している（第20図）。幅は8m程、1.5mの深さで緩やかに落ち込む。谷部の覆土は、地形に沿った斜面堆積となる。堆積土は、19層に分層されるものの大きく3つに分けられる。地山となる礫混じりの明黄褐色土の影響の強い下部の第13層、第15層、厚く堆積し遺物の包含層となる明褐色土層（第8層～第12層、第14層、第17層）、谷部の上層を形成する黒褐色土である第1層～第8層となる。第13層は、谷そのものに直接関連するもので、谷地形を反映させる。その上を広く覆う明褐色土は周辺に広がる縄文時代集落に関わるもので、遺物包含層を形成する。特に谷の肩部に近い場所での出土が目立つ。この明褐色土が谷部を覆った後、谷中央の窪地部分を黒褐色土が埋め尽くしていた。明褐色土は堆積後谷中央が流下し第10層とした堆積土の上面で2次的な谷地形を形成していたこととなる。それは、縄文時代集落が消失した以降である。

竪穴建物による集落は、この埋没谷を見下ろす丘陵部に展開していたものと考えられる。谷の源頭部が対象となった確認調査に関わるトレンチから出土した第26図№61の埋甕は、曾利Ⅳ式の深鉢であるが、竪穴建物の南東隅に埋甕を埋設することを原則とする堀ノ内A遺跡の特徴から、そこに竪穴建物が築かれていたことが指摘される。堀ノ内A遺跡は、南西側に大きな谷戸が入り丘陵地形となるが、その丘陵縁辺を南西端として遺跡が展開し、平野部を望む西側は、このような小さな谷が開析され、それを取り囲むように居住域が広がる。これらの谷の多くは、地形環境に作用され埋没谷となっている場合が多い。



第20図 2区北側谷部 実測図

第2節 遺物

1. 土器

SK-02（第21図） 1は、堅穴建物の一部と思われるSK-02で見つかった埋甕である。口縁部と底部を欠損しており、胴部から頸部にかけて埋甕としていた。胴部外面には横位の細かい条線文を地文とし、両脇を指修形した縦位の隆帯と太い沈線による蛇行懸垂文を施す。2は、床面からの出土で、胴部を太い隆帯により区画し、その内部を縦の条線で充填する。外反する口縁部は無文で、頸部にX字状の把手を付す。

1区（第21図） 4は、1区から出土した破片資料で、斜方向の条線文が見られる。条線文はその下端を隆線で区画する。

SB-01（第21図～第24図・第28図） 5と13は埋甕となっていた事例である。5は、頸部に2条単位の連弧状沈線文が一部確認できる深鉢で、口縁端部と胴下半を欠く。胴部の径は19.0cmとなる。13はX字状の把手が対になっている鉢で、大きく張り出した胴部から緩やかに内傾する肩部を経て、外傾する口縁へと移行する。胴部と口縁を画する頸部には隆線を付す。把手部の隆線は3本単位で、頸部隆線と共に竹管修形されている。口縁から胴下半までのほぼ全面にLRの縄文が施される。口径37.5cm、底径10.8cm、器高30.2cmを測る。6～12・14はSB-01の床面からの出土として捉えた遺物である。6は、床面で横位の状態で全体の1/2が出土した。頸部がくびれる深鉢で、口縁部は隆線区画した内部を縦位の沈線で充填し、その中央に渦巻文を貼付する。また、下部が弧状となる隆線区画のつなぎ部には、独立した渦巻文を貼付するが、口縁部渦巻突起と連結し4ヶ所に形成されるものと推定される。頸部は無文帯とし、屈折部以下にLRの縄文を施す。口径17.0cm、胴径15.5cm、底部を欠損するものの器高23.2cmを測る。7～9、11、12は地文としての条線文と隆線との組み合わせを基本とする事例である。9と11は、条線が綾杉状となる。10は直線的に開く口縁部破片で、口唇部内側に肥厚する。また、頸部屈折部に波状と水平の隆線を二段に付す。14は、渦巻きの隆線と沈線で構成される口縁部破片である。16は、条線の見られる土製円盤で長さ3.7cm、幅3.8cm、厚さ1.0cm、重さ14.0gを測る。

23～30はSB-01の覆土中からの出土としたものをまとめた。23は、波状の押し引き沈線と爪型刺突列が施される。24は縦位の条線文、25は縦位の沈線文がそれぞれ見られる。26は、内湾気味に立ち上がる口縁部破片で、地文にRLの縄文を施し、口縁部の区画隆帯内側を沈線で区画する。27も口縁部と思われる破片で、内湾して立ち上がる。口縁部文様体の上下を横位の竹管沈線で区画し、その間に縦位の竹管沈線を並べて文様とする。28は、4本単位の平行沈線文を横位に施す。15は深鉢の底部破片で、正位の状態で出土していた。底径9.8cmを測る。

31は、直交する横位3条、縦位2条の隆線文が見られる。32は、縦位と横位の沈線文に渦巻文の組み合わせが見られる。31、32は同一個体の可能性がある。29は、上位を鐙状の隆帯で画し、その下に縦位の細かい条線文を施す。30は、緩やかに外反する胴部の破片で、RLの縄文を地文とし、2条単位の縦位沈線により区画する。

33～40は、SB-01のピットに関わる出土資料である。33～36はP-1から出土している。33～35は2本一組の縦位隆線を胴部に施す胴下半部の破片である。33、34は同一個体の可能性があり、縦位の条線文を施す。36は、内湾しながら緩やかに外傾する胴部破片で、LRの縄文が施される。38は、P-2からの出土である。上位に波状の隆線で画し、その下に太い条線文を鋸歯状に連続させる。39は、P-6からの出土である。口縁部の破片で外面に刺突を施す縦位の隆線を付す。口縁の上端面は、内側に肥

厚させ沈線による渦巻文を施す。40は、周溝内からの出土である。口縁部の破片で大きく内傾する上端部分は欠損する。外面に棒状の隆線により連接する重弧文を施す。また、左端には円文が見られる。

谷部（第25図） 埋没谷は、大きく2度の堆積層に覆われていた。土器等の遺物の大半は、1次の堆積層から出土したものであった。41～50は、谷部からの出土遺物となる。41、42、43は太い沈線による蕨手文様となる渦巻文が施文される諸例と考える。41は、くの字形に強く屈折する縦長の突帯を付す資料で、四角に細い隆帯による区画内に、一端が槍先様の三叉状沈線を施す。42、43は上位を横位の直線文で区画する。42は、口縁部破片で直線的に開き、端部を面取りする。44は内湾する口縁部破片で把手を付す。45は、下位に緩やかな弧状となる沈線、中位以上に横位の棒状の沈線を施す。41と同一個体と思われる。46は、口縁部付近の破片で、外反しながら直線的に開き、上端部が内傾する。方形基調の沈線による区画の中に縦位の沈線を施す。47は、中空把手の破片で口縁端部に付されたものである。隆帯と沈線により構成される文様は、渦巻や蕨手などからなり加飾性が極めて強く、把手の内側には円形の透穴を設けている。

48は、外傾して直線的に開きその上部を内湾させる特異な器形が想定される薄い破片で、方形の細かい刺突文を下部に向かって扇状に施す。49は器壁が薄く明瞭に内湾する口縁部破片で、蛇行する横位の低い隆線を貼りつけ、全面にRLの縄文が施される。蛇行隆線の脇に穿孔がみられる。50は隆線による重弧文の一部と思われるものが施された破片である。

2区（第25図・第26図） 52～60は、SB-01とSB-02の竪穴建物に関わる2区の遺物包含層から出土したものである。53は、4本の隆線により文様の区画を構成するものである。内側2本の隆線には押し引き刺突文を施す。54は、細かい条線文が見られる事例となる。55は、低い隆帯脇を指で修形し、その内部を条線で充填する。56は、指修形による太い隆帯が付されている。57は竹管修形による刻み隆線を多段に形成し、以下は縦方向の条線が施される。58は、無節の縄文を地文とし、2本単位の弧状沈線を施す。口縁端部内側に、円形を指向する隆帯を付す。59は横位の条線文に細い粘土紐を貼付し加飾する。下部は縦の条線文が施される。60は、縦位に隆線と条線が施されている。

3区（第26図・第27図） 調査対象地内の確認調査時で出土した遺物を一括する。61は、埋甕として使われた深鉢で、口縁の1/3程度を欠損する。底部から緩やかに外反して胴部となり、口縁部で大きく開き口縁端部を丸く整える。大きさは、口径21.4cm、底径6.8cm、器高25.5cmを測る。口縁部に2条の横線文を巡らせ、胴部を蛇行する懸垂文で縦割りし、その間にRLの縄文を施す。62は、口縁部の破片で、端部を面取りする。口縁下に刺突隆帯を巡らす。

63～65は、それぞれ口縁部破片で細い隆線による褶曲文、重弧文の見られる諸例となる。66～69は、細かい条線文が施された胴部と底部の破片で、67～69は綾杉状に施される。70は内湾する胴部破片で連続する細かい刺突を単位として八の字状の文様を構成する。71は、口縁部破片で端部を丸くする。口縁下に横位の太い沈線を巡らす。72・78は、沈線による縦位の八の字状文を施す。73は、波状口縁になるとと思われる突起部の破片で、口縁端部外面に面を形成して刺突列で充填する。74は、口縁端部付近の破片で、2条の沈線が巡り、以下にRLの縄文を施す。75は底部破片で底径7.7cmを測る。76は、把手部分の破片資料である。77は、口縁部破片で端部を尖がり気味に丸くする。3条の太い沈線が横位に巡る。79は、LRの縄文を地文として3条からなる細い沈線を連弧状に施す。82は、薄手のよく焼きしまった底部片で、指頭による整形痕を残す。底径8.6cmと推定される。83は、円形に巡る隆帯内側に連続する刺突文を施す。84は頸部片で、横位の蛇行隆線を巡らす。85は、深鉢底部で底径8.0

cmとなる破片で外面に弧状となる隆線が見られる。86も指修形による弧状の太い隆帯が施される。

87～90は、土製円盤とした土器片である。87は、3.4cm×3.7cmの不整の五角形で厚さ1.2cmを測る。88は、蛇行する沈線、刺突文、縄文が残るもので、4.0cm×3.8cmの不整の三角形で厚さ1.1cmを測る。89は、全面に縄文が残るもので、3.9cm×3.8cmの不整の四角形で厚さ1.0cmを測る。90は、径3.7cmの不整円形で厚さ1.1cmを測る。

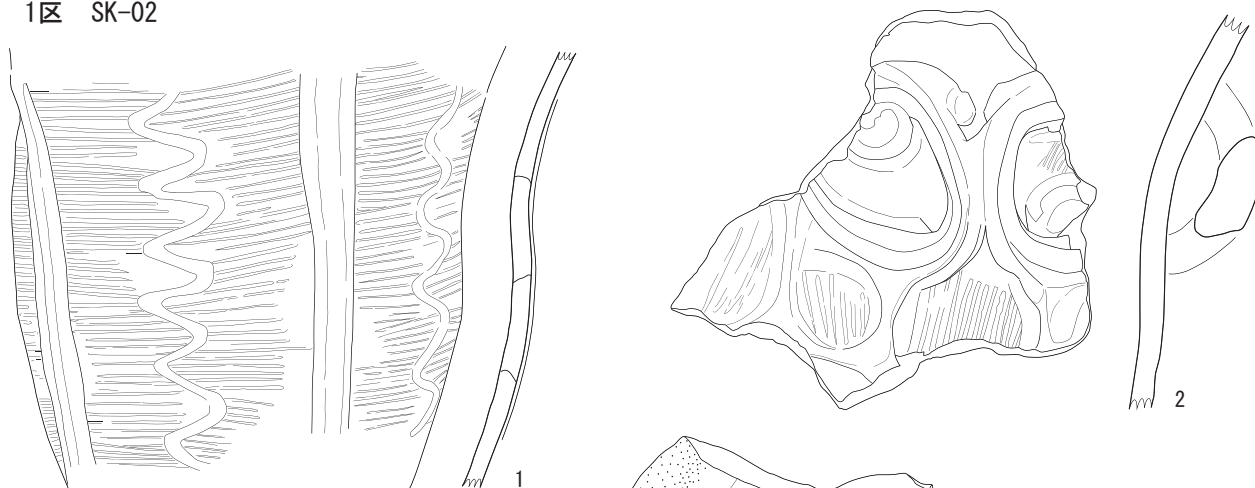
その他（第28図） 92は、縦位の沈線文が見られる。93は、細い粘土紐を格子状に組む。94は、大柄な渦巻文と放射状に展開する条線文により構成されている。95は、角状の突起を持つ波状口縁の破片で、口縁端部外面に浅い窪みを作り、その中に2列に並ぶ刺突文を施す。96は、屈折して開く口縁端部の破片で耳状の突起が付く。97は底部破片で、底径10.4cmを測る。98は、内側にタタキ目を残す須恵器片で、他所から流入したものであろう。

2. 石器（第21図・第23図・第25図・第27図・第28図）

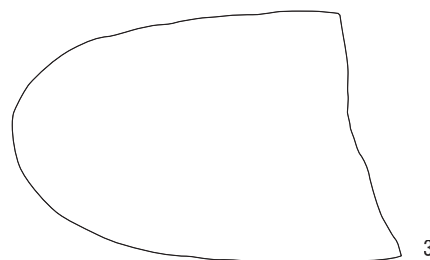
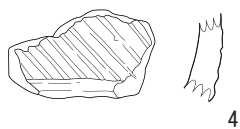
今回の調査での石器の出土は、極めて少なく器種も大きく偏る。その多くは、砂岩・火成岩類の台石あるいは石皿かと思われる大型品で占められる。3は台石としたものの、破損品である。残存部分で幅15.6cm、厚さ10.0cmを測る。平坦面を敲くか磨くなどの作業に供した面を作業面とすると、片側の平坦面がそれに相当する。SB-01の床面において見つかった19～22、101も同様の事例となる。作業面とした平坦面が僅かに窪む20は、石皿となるのかもしれない。この20以外が破損品となっている点も特徴的である。谷部からの出土である51も台石の諸例とした。

17はSB-01の床面で出土したもので、叩石とした。片側が欠損しているが長楕円形と思われ、残存する部分で長さ10.5cm、厚さ4.7cmを測る。その先端と3つの側面に敲打痕が見られる。18は磨石で、SB-01の床面から出土した。表裏面に磨痕が見られ、側面に敲打痕が確認される。11.5cm×10.3cm、厚さ5.1cmを測る。37は、SB-01に関わるP-1から出土した凝灰質砂岩製の磨製石斧の破片である。残存部分で長さ4.9cm、刃幅2.1cm、厚さ0.8cmを測る小型品である。99、100は表採資料黒曜石製の石鏃で、長さ1.6cm程の小型品である。石鏃の出土は極めて限定的で、この小型品のみが確認されている。

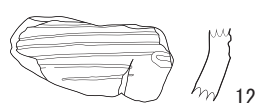
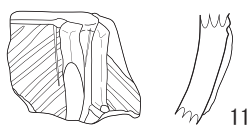
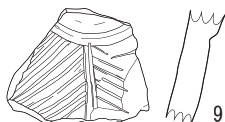
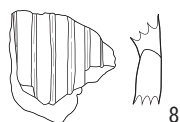
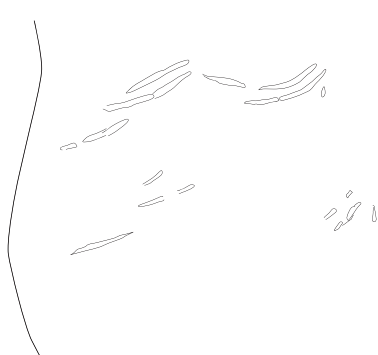
1区 SK-02



1区

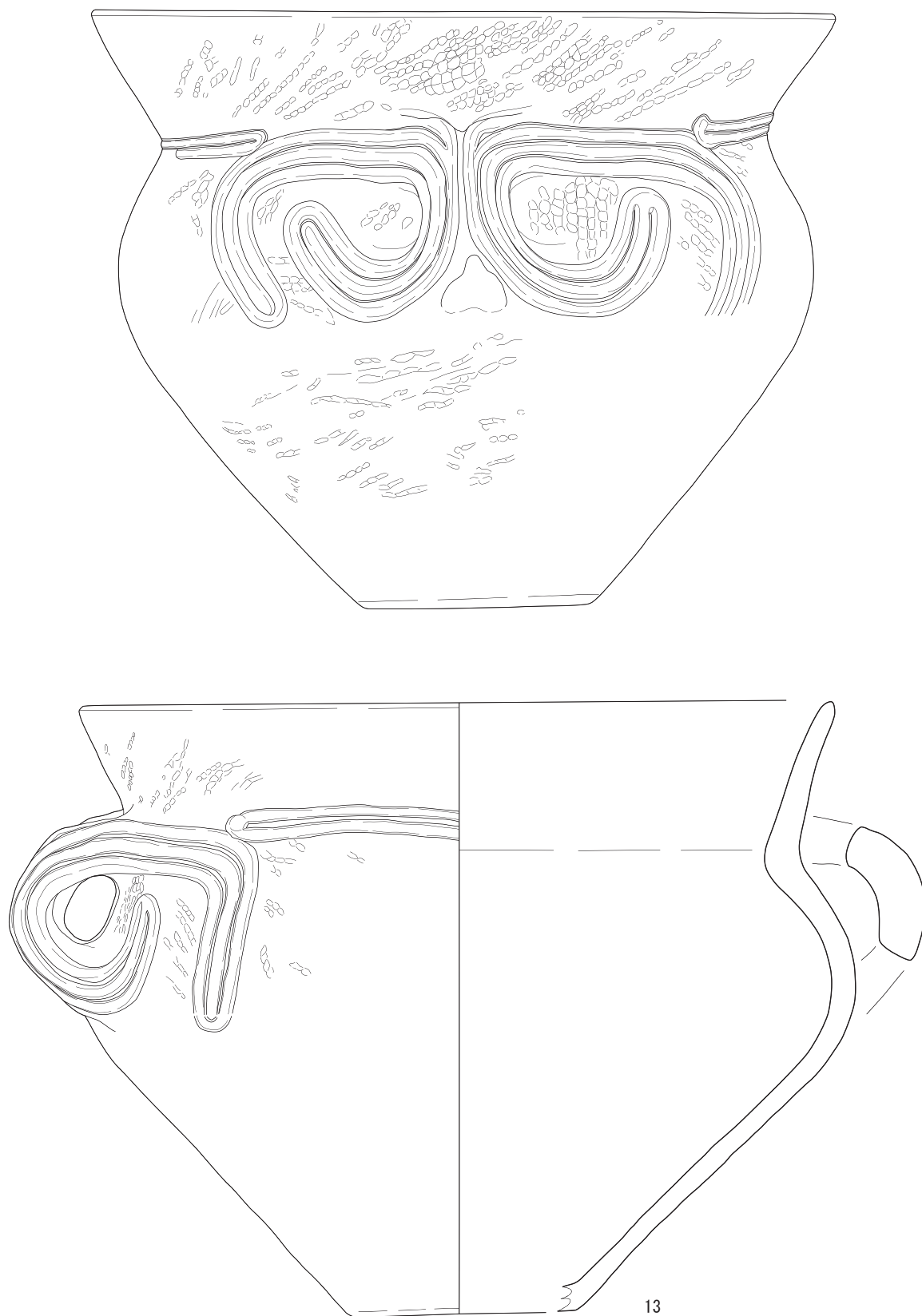


2区 SB-01

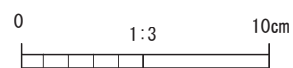


第21図 遺物実測図(1)

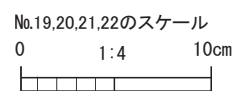
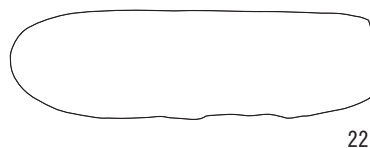
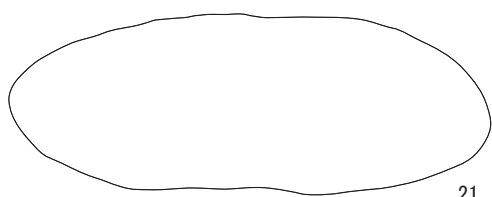
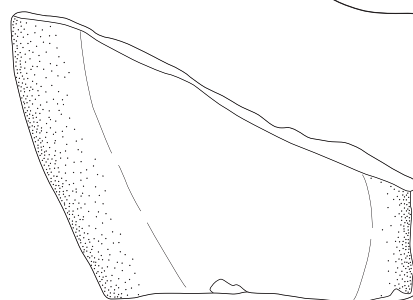
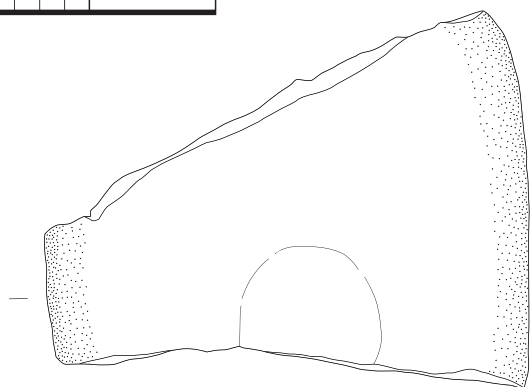
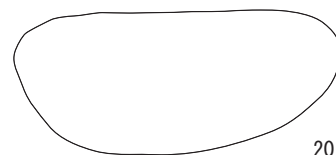
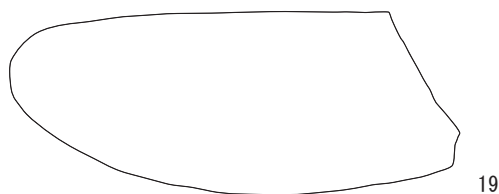
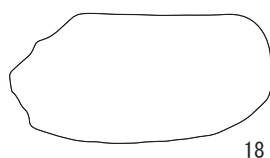
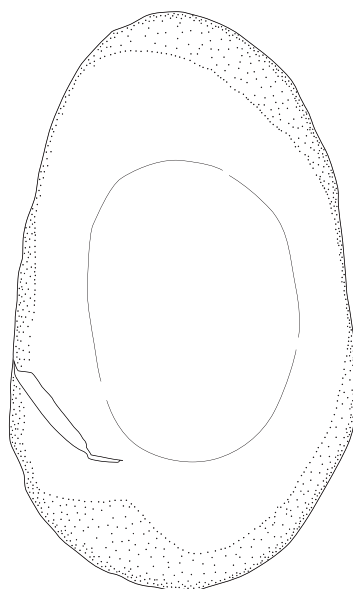
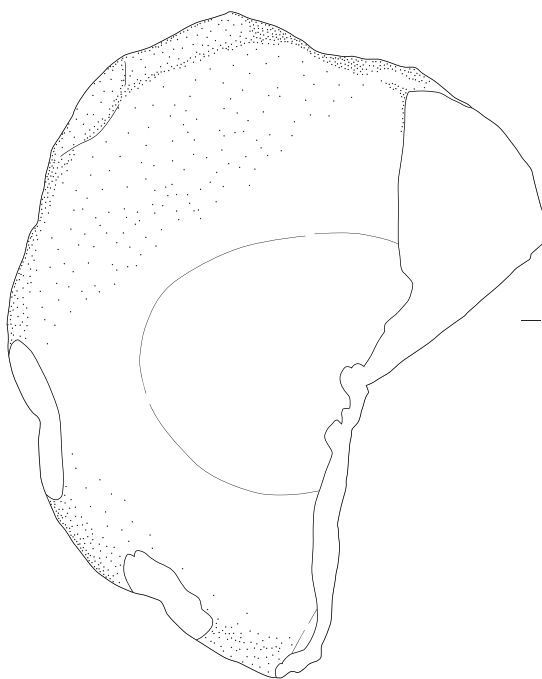
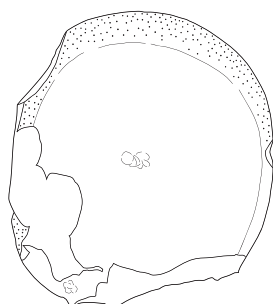
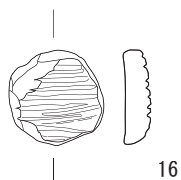
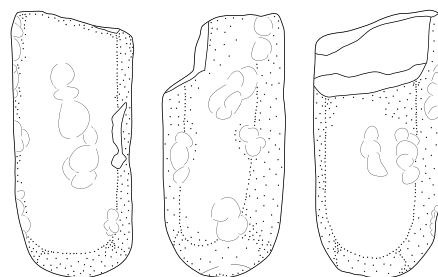
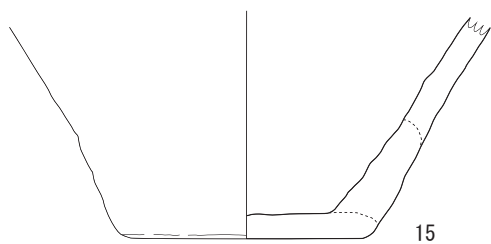
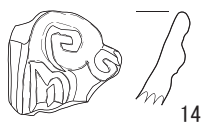




第22図 遺物実測図(2)

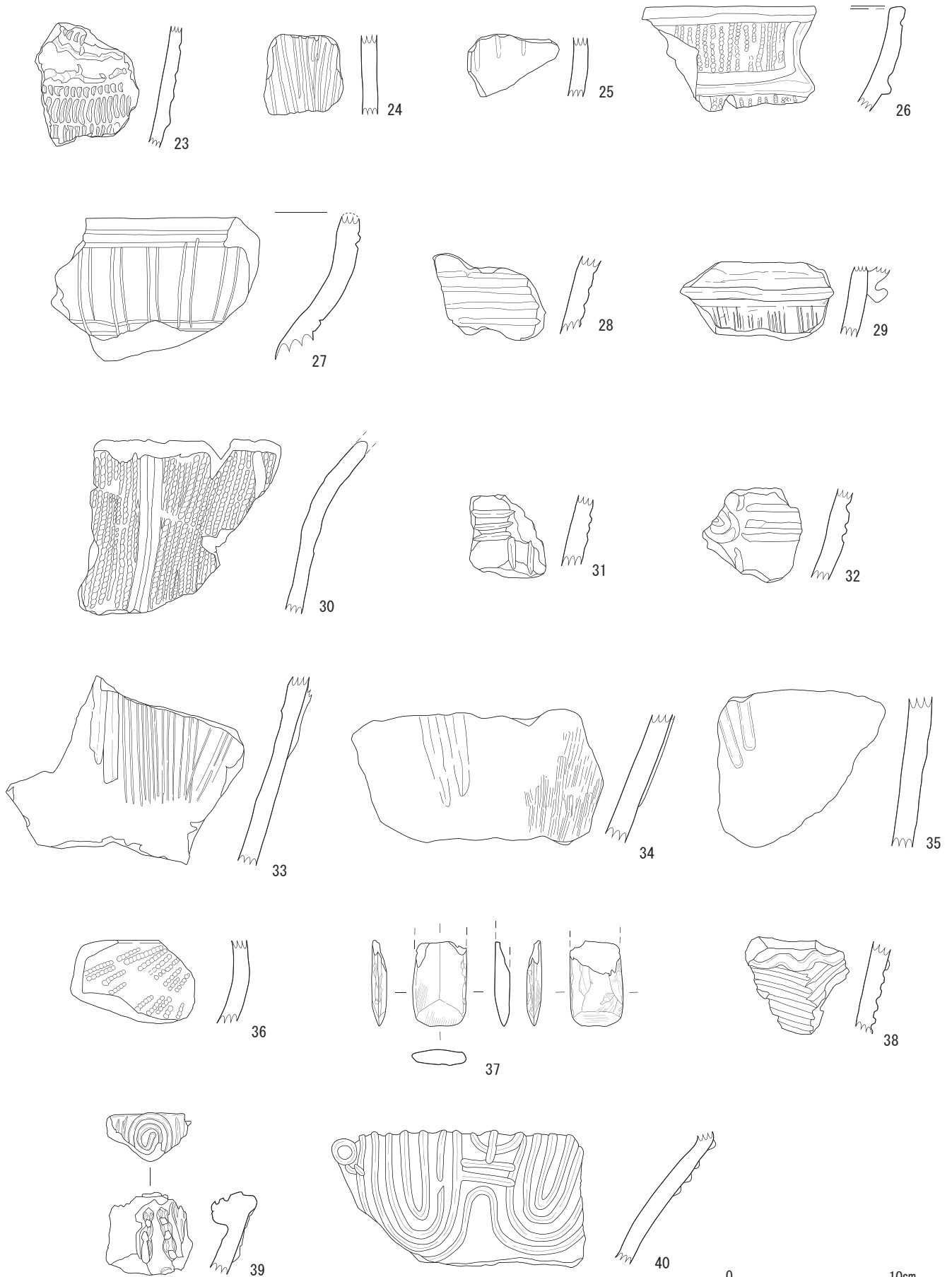


2区 SB-01



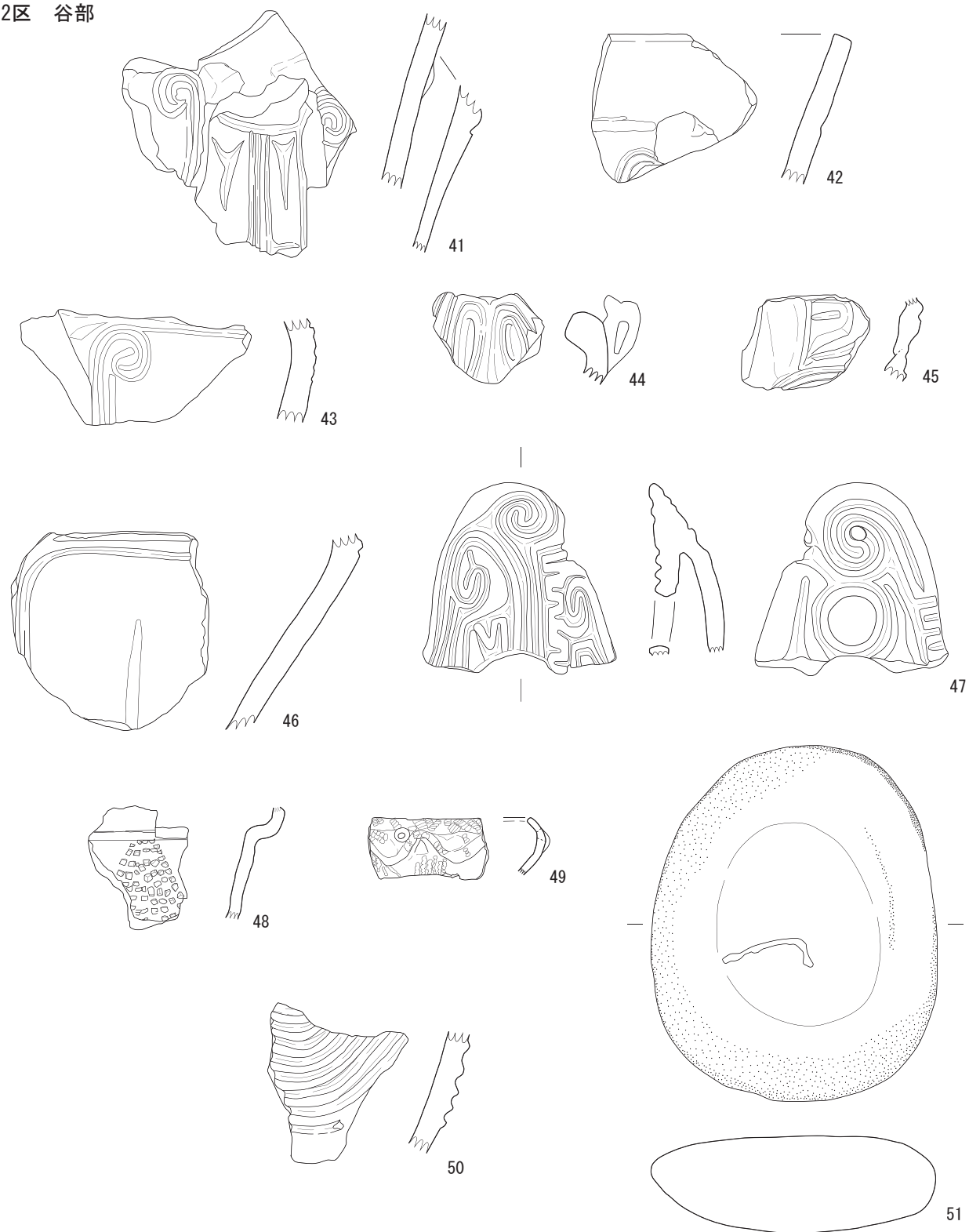
第23図 遺物実測図(3)

2区 SB-01

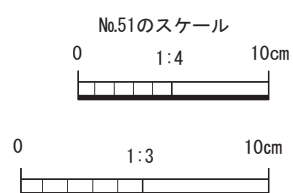
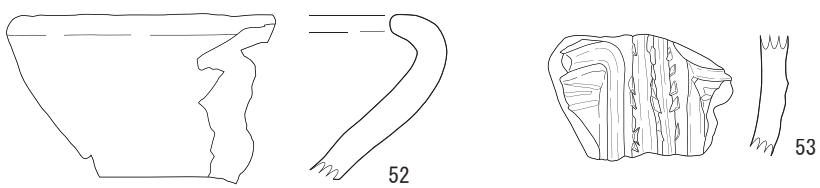


第24図 遺物実測図(4)

2区 谷部

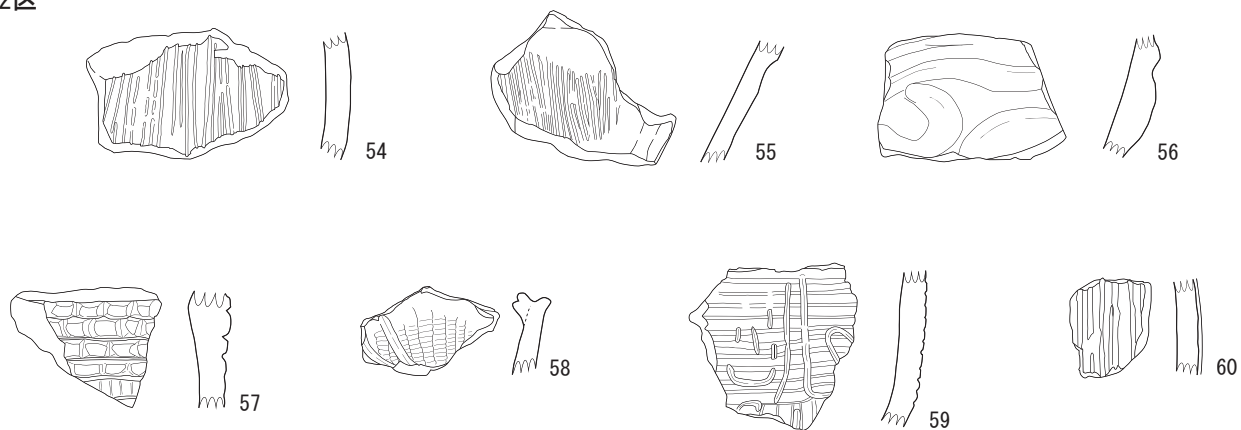


2区

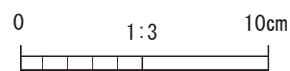


第25図 遺物実測図(5)

2区

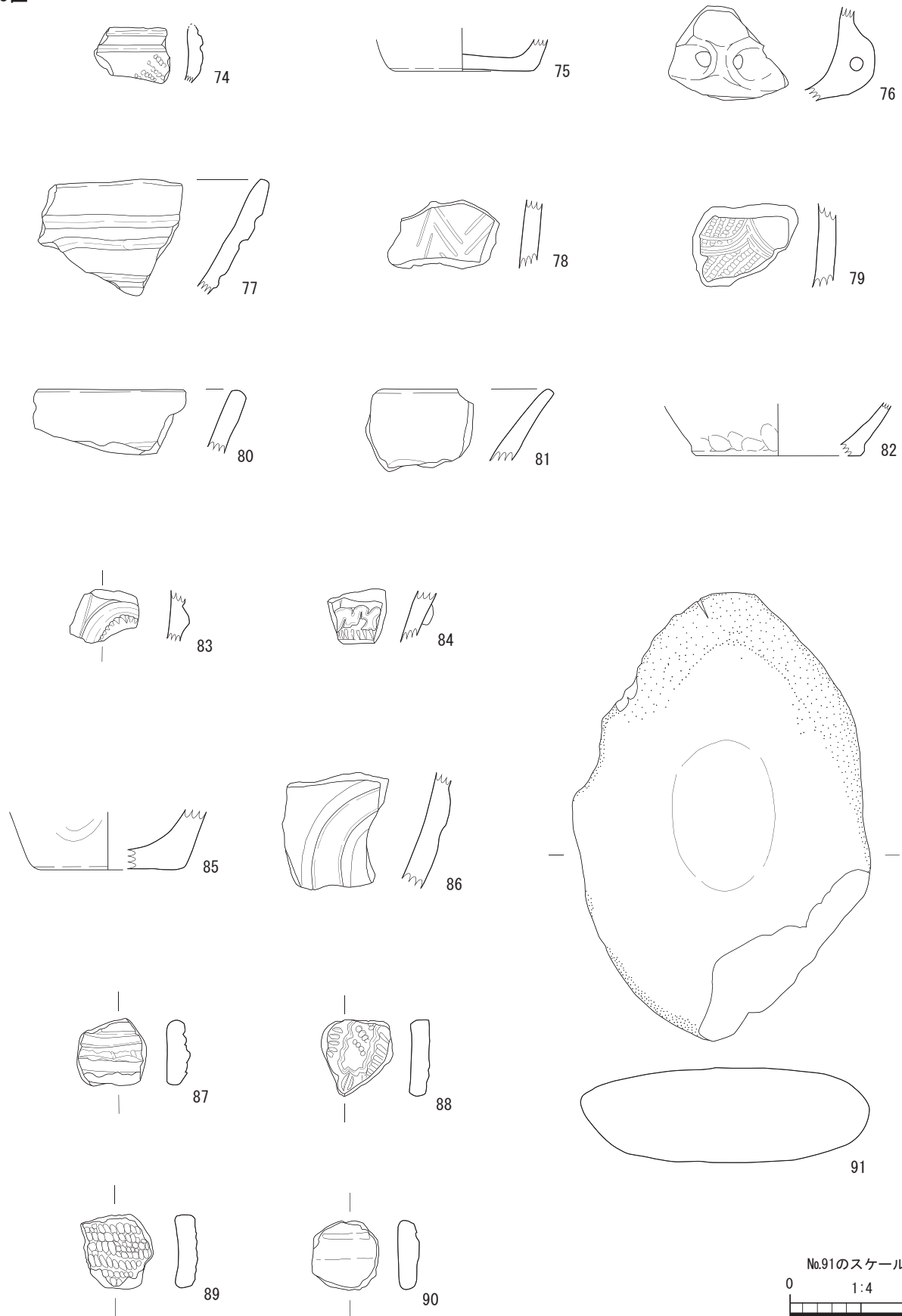


3区



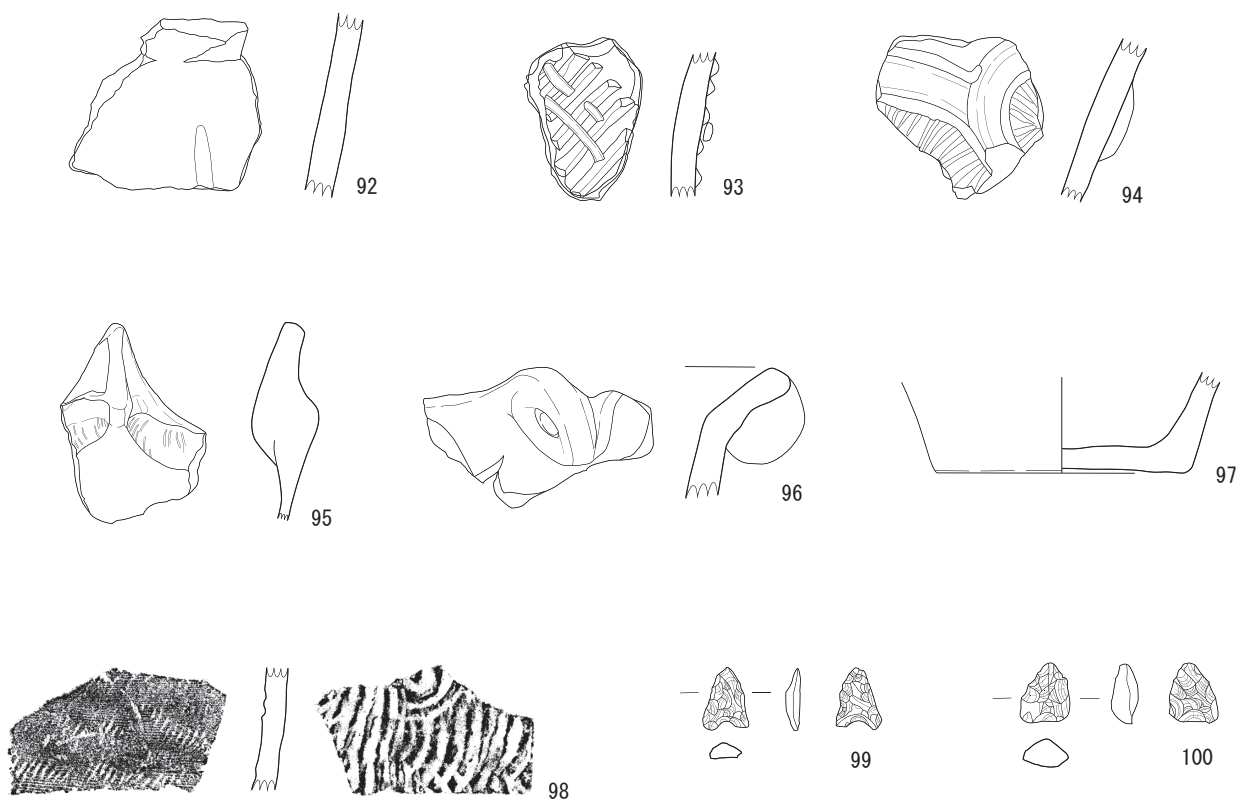
第26図 遺物実測図(6)

3区



第27図 遺物実測図(7)

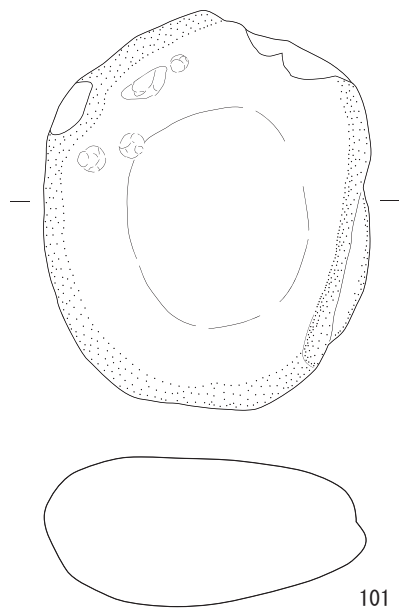
その他



No.99, 100のスケール

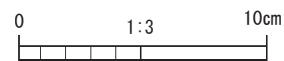
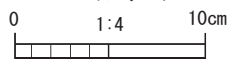


2区 SB-01



101

No.101のスケール



第28図 遺物実測図(8)

第1表 出土土器観察表

掲載 No.	出土地点		型式	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
	区	遺構			器高					
1	1区	SK-02 埋壺	曾利Ⅳ	深鉢型土器	<17.6>	粗 白灰色の 粒子含む	不良	橙	底部無・体部最大部 一周あり・口縁部無	表面もろい
2	1区	SK-02	曾利Ⅲ～Ⅳ	X把手付深鉢	<15.8>	粗	良	外：褐 内：明褐	一部	
4	1区		曾利Ⅱ～Ⅲ		<3.5>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	外：赤褐 内：明褐	一部	斜線文系
5	2区	SB-01 埋壺	東海系		<12.7>	粗 1～3mmの 粒子を含む	不良	黄褐	体部上部1/3	連弧状沈線文 三河方面との関係か
6	2区	SB-01	曾利Ⅱ		<23.2>	粗 1～2mmの 砂粒（白・灰）含む	不良	暗赤褐	底部無	渦巻文 加曾利Eの影響あり
7	2区	SB-01	曾利Ⅱ～Ⅲ		<5.1>	粗 1～3mmの 粒子を含む	不良	外：赤褐 内：褐	一部	
8	2区	SB-01	曾利Ⅱ～Ⅲ		<4.3>	粗	不良	外：明赤褐 内：暗褐	一部	
9	2区	SB-01	曾利Ⅱ～Ⅲ		<4.5>	粗	不良	明褐	一部	唐草文系か
10	2区	SB-01	曾利Ⅱ～Ⅲ		<7.3>	やや粗 白色の 粒子を含む	良	褐	一部	
11	2区	SB-01	曾利Ⅱ～Ⅲ		<4.4>	粗 1～3mmの 粒子を含む	不良	褐	一部	唐草文系か
12	2区	SB-01	曾利Ⅱ～Ⅲ？		<3.1>	粗	不良	外：赤褐 内：明褐	一部	
13	2区	SB-01 埋壺	曾利Ⅱ	X把手付鉢	30.2	粗	不良	外：にぶい黄褐 内：明赤褐	3/4	メガネ状把手の変形
14	2区	SB-01	曾利Ⅲ		<4.5>	やや粗 白色の 粒子を含む	不良	外：明赤褐 内：褐	一部	
15	2区	SB-01	曾利		<7.3>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	赤褐	底部完存	表面磨減
16	2区	SB-01	曾利	土製円盤		やや粗 1～2mm の粒子を含む	良	橙	完存	長さ3.7cm / 幅3.8cm / 厚さ1.0cm / 重さ14.0g
23	2区	SB-01 2層	藤内		<6.9>	粗	不良	にぶい褐	一部	
24	2区	SB-01 2層	曾利Ⅳ		<4.5>	粗 1～2mmの 粒子を多く含む	良	内：オリーブ褐	一部	条線文
25	2区	SB-01 2層	曾利Ⅳ		<3.3>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	良	橙	一部	
26	2区	SB-01 2層	曾利Ⅱ		<5.9>	粗 1～3mmの 粒子を含む	良	明赤褐	口縁一部	加曾利E系
27	2区	SB-01 2層	東海系？		<8.1>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	外：灰黄褐 内：明赤褐	口縁一部	厚手 竹管沈線文
28	2区	SB-01 2層			<3.5>	粗 1～3mmの 粒子を含む	良	外：明赤褐 内：明赤褐	一部	
29	2区	SB-01 2層	曾利Ⅲ併行か？		<4.4>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	外：明赤褐 内：褐	一部	つば状突帯 胴部粗い条線文
30	2区	SB-01 2層	曾利Ⅲ～Ⅳ		<9.7>	密 白・黒の 粒子を含む	良	にぶい橙	一部	
31	2区	SB-01 2層	曾利Ⅲ		<4.2>	密 白・黒の微粒子	不良	明赤褐	一部	田の字区画
32	2区	SB-01 2層	曾利Ⅲ		<5.2>	粗	不良	外：明赤褐 内：赤明褐	一部	田の字区画
33	2区	SB-01 P-1	曾利Ⅲ～Ⅳ	深鉢	<10.5>	粗 2～7mmの白・ 灰色の石を多く含 む	不良	外：明赤褐 内：にぶ黄褐	一部	外面は条線文(10本/2cm)の上に浮文が 2本付く。内面の一部に黒い付着物あり
34	2区	SB-01 P-1	曾利Ⅲ～Ⅳ	深鉢	<7.0>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	外：明赤褐 内：黒	一部	隆帯の一部と縦方向の条線文がわずかに 残る
35	2区	SB-01 P-1	曾利Ⅲ～Ⅳ		<8.5>	粗	不良	外：赤褐 内：にぶい黄褐	体部一部	
36	2区	SB-01 P-1	曾利		<4.5>	粗	不良	暗赤褐	体部一部	
38	2区	SB-01 P-2	曾利Ⅱ～Ⅲ		<5.4>	密 1～3mmの礫、 白、灰、赤色の粒 子を多量に含む	不良	外：にぶい黄褐 内：橙	一部	
39	2区	SB-01 P-6	曾利Ⅰ		<4.6>	粗	不良	黒褐	一部	
40	2区	SB-01 周溝内	曾利Ⅰ		<7.5>	粗 金雲母を含む	良	外：にぶい赤褐 内：赤褐	一部	
41	2区	谷部	井戸尻		<9.0>	粗	不良	赤褐	一部	
42	2区	谷部	井戸尻		<7.6>	粗 1～2mmの 粒子を多く含む	不良	外：明赤褐 内：明褐	口縁一部	
43	2区	谷部	井戸尻		<5.5>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	褐	体部一部	
44	2区	谷部	井戸尻		<4.3>	粗 1～3mmの 粒子を含む	不良	明赤褐	一部	メガネ状把手

掲載 No.	出土地点		型式	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
	区	遺構			器高					
45	2区	谷部	井戸尻		<4.8>	粗	不良	黒褐	一部	
46	2区	谷部	井戸尻		<10.1>	粗 0.5～1mmの砂礫(白・灰・黒)含む	不良	褐 黒褐	一部	
47	2区	谷部	井戸尻	深鉢	<9.7>	粗 黒・白・肌色の粒子を多く含む。少量の雲母を含む	良好	橙		口縁部 把手
48	2区	谷部	東海系		<6.0>	粗	不良	明赤褐	一部	薄手土器 刺突文系
49	2区	谷部	東海系		<3.2>	粗	不良	暗灰褐	口縁一部	
50	2区	谷部 9層	井戸尻～曾利 I		<6.6>	粗	不良	暗赤褐	一部	重弧文又は褶曲文
52	2区		曾利 I	内湾口深鉢	<7.0>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	赤褐	口縁一部	
53	2区		曾利 I		<6.7>	粗 1～2mmの粒子を含む	不良	外：明赤褐 内：橙	一部	
54	2区		曾利IV		<5.0>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	良	外：赤褐 内：明褐	一部	
55	2区		曾利IV		<7.0>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	褐	一部	
56	2区		曾利		<5.0>	粗 1～3mmの粒子を含む	不良	明赤褐	一部	
57	2区		曾利 I		<4.7>	粗 1～3mmの粒子を含む	不良	赤褐	一部	
58	2区		東海系		<3.5>	粗	不良	赤褐	一部	縄文に連弧文
59	2区		曾利 II～III		<6.4>	粗 1～3mmの粒子を含む	不良	外：暗赤 内：明褐	一部	紐線文類系
60	2区		曾利 III～IV		<4.0>	粗	不良	外：赤褐 内：明褐	一部	
61	3区	埋甕	曾利IV		<25.5>	やや粗 1～2mmの白色の粒子含む	不良	外上：暗赤褐 外下：赤褐	口縁部 約3/5 体部 完形 底部 ほぼ完形	表面もろい
62	3区		井戸尻		<6.0>	粗 1～2mmの粒子を多く含む	不良	明褐	口縁一部	
63	3区		曾利 I		<4.9>	密	良	外：にぶい黄褐 内：橙	口縁一部	褶曲文
64	3区		曾利 I		<2.7>	密	良	橙	一部	褶曲文 口縁
65	3区		曾利 II		<3.5>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	にぶい赤褐	口縁一部	重弧文
66	3区		曾利IV		<3.5>	粗	不良	赤褐	一部	
67	3区		曾利IV		<5.3>	粗	不良	外：赤 内：暗褐	一部	
68	3区		曾利IV		<5.2>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	外：明赤褐 内：褐	一部	
69	3区		曾利IV		<5.4>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	褐	一部	
70	3区		曾利IV		<4.8>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	外：橙 内：明赤褐	一部	八の字刺突
71	3区		曾利IV		<3.2>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	褐	口縁一部	
72	3区		曾利 V		<5.8>	粗	不良	にぶい黄褐	一部	
73	3区		北屋敷		<2.5>	白・黒色粒子を含む。雲母を含む	良	にぶい橙 断：黄灰	一部	
74	3区		東海系		<3.0>	粗 1～3mmの粒子を含む	不良	外：にぶい黄褐 内：黒褐	口縁一部	
75	3区				<1.7>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	外：赤褐 内：にぶい褐	底部一部	
76	3区			X把手	<5.0>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	明赤褐	一部	
77	3区		曾利		<6.1>	粗 1～2mmの粒子を多く含む	不良	明赤褐	口縁一部	
78	3区		曾利 V		<3.5>	粗 1～3mmの粒子を多く含む	不良	赤褐	一部	
79	3区		東海系		<4.1>	粗 白色細粒雲母を含む	不良	明赤褐	口縁一部	連弧文
80	3区		曾利		<3.4>	粗 白色細粒雲母を含む	不良	にぶい橙 断：オリーブ黒	口縁一部	
81	3区		曾利		<4.3>	白色粒子を含む	不良	浅黄橙 断：褐灰	口縁一部	
82	3区		東海系		<2.6>	粗 1mmの粒子を含む	不良	にぶい黄褐	底部一部	底部破片 指頭痕

掲載 No.	出土地点		型式	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
	区	遺構			器高					
83	3区		藤内		<2.7>	粗 白色粒子を含む	不良	にぶい橙	一部	
84	3区		曾利Ⅰ～Ⅱ		<2.8>	粗 白色粒子を含む	不良	にぶい橙 断：にぶい黄橙	口縁一部	
85	3区		曾利		<3.0>	白色粒子を多く含む	良	にぶい赤褐 断：灰褐	底部一部	
86	3区		曾利Ⅲ～Ⅳ		<6.0>	白・赤色粒子を含む	不良	橙	一部	
87	3区		井戸尻か？	土製円盤？		やや粗 白色粒子を含む	良	褐	—	長さ3.4cm / 幅3.7cm / 厚さ1.2cm / 重さ16.2g
88	3区		藤内	土製円盤？		粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	外：明褐 内：明赤褐	—	長さ4.0cm / 幅3.8cm / 厚さ1.1cm / 重さ16.5g
89	3区			土製円盤？		粗 白色粒子を含む	良	にぶい褐	—	長さ3.9cm / 幅3.8cm / 厚さ1.0cm / 重さ15.8g
90	3区			土製円盤		やや粗 白色粒子を含む	不良	赤褐	—	長さcm3.7 / 幅3.7cm / 厚さ1.1cm / 重さ14.6g
92			井戸尻		<6.9>	粗 0.5～1mmの砂 礫(白・灰・黒)含む	不良	にぶい赤褐	一部	
93			曾利Ⅰ～Ⅱ		<4.5>	粗	不良	褐	一部	籠目文
94			曾利Ⅳ		<6.5>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	明赤褐	一部	
95			北屋敷		<7.8>	粗 0.5～3mm礫 を含む	良	黒褐	一部	
96		表採品	井戸尻		<5.1>	粗 1～3mmの 粒子を多く含む	不良	赤	口縁一部	
97					<3.6>	粗 きめが粗く白 色砂粒を多く含む	不良	にぶい橙 内・断：灰褐	底部1/3存	
98	3区			須恵器壺	<5.3>	密	良	暗灰黄	一部	

第2表 出土石製品観察表

掲載 No.	出土地点		器種	石材	法量 (cm・g)				備考
	区	遺構			長さ	幅	厚さ	重さ	
3	1区	SK-02	台石	砂岩	9.0	15.6	10.0	1750	
17	2区	SB-01	叩石	砂岩	10.5	5.1	4.7	400	
18	2区	SB-01	磨石	砂岩	11.5	10.3	5.1	900	
19	2区	SB-01	台石	火成岩	35.2	27.3	9.5	1110	火成岩は花崗岩類の可能性が高い
20	2区	SB-01	台石	砂岩	32.3	20.3	6.5	5550	
21	2区	SB-01	台石	火成岩	19.5	25.2	9.1	6750	
22	2区	SB-01	台石	火成岩	15.3	20.0	5.7	2650	
37	2区	SB-01	磨製石斧	凝灰質砂岩	4.9	2.1	0.8	19.3	SB-01 P-1出土
51	2区	谷部	台石	火成岩	24.0	19.3	6.5	4700	
91	3区		石皿	火成岩	30.6	18.3	7.5	6050	
99	表採		石鏃	黒曜石	1.6	1.2	0.4	0.6	
100	表採		石鏃	黒曜石	1.6	1.3	0.7	1.1	
101	2区	SB-01	台石	火成岩	20.8	17.2	7.8	4500	

第4章 まとめ

今回の発掘調査では、竪穴建物3棟、土坑1基などが確認された。この調査に先立って実施した確認調査でも埋甕1基が確認されており、開発に関わる調査対象地内で4軒の竪穴建物の所在が窺えることとなった。これにより竪穴建物は、対象地の北西側で確認された谷部を取り囲むように点在していることが分かった。竪穴建物は、時期差による重複は認められず、大きな時代差はなく、段階的な集落造営の中での変遷として捉えられるものである。さらに、SK-01を墓制に関わるものとすれば、居住域に隣接する墓域の展開が想定される。

有度丘陵に展開する縄文時代中期後半の集落に関わる竪穴建物は、今回の調査成果によれば、不整ながらも円形の平面形で、南東隅に埋甕を設け、壁周溝を巡らせることを基本としているとなるが、第2区で見つかったSB-01はその典型例として捉えることができる。2022年に調査された西側部分での成果を踏まえると、SB-01の具体的な特徴が指摘される（静岡市教育委員会2023）。2022年の調査は、幅2m程の調査区でピットの集中域とともに石組みの遺構が見つかった。今回の調査により、それが住居に関わる石囲い炉であることが明らかとなった（第29図）。遺構として斜面下ほどその残存状態は悪く、西側への周溝の継続は確認されていない。石囲い炉は井桁状に自然石を組んで構築されていた。南北に3個ずつで並列する石列が確認されている。石列は、長さ20～45cmの長楕円の自然石を並べたもので、内側に幅62cmの炉を作り、北側列を8cm高くしていた。東西側にも同様に石列があったと思われるが、それぞれ据え穴が確認されたものの、石自体は消失していた。今回の調査で確認できた据え穴からは、比較的大振りの石が据えられていたことになる。石囲い炉は、石組みの内側で62cm×60cmほどのほぼ正方形の形状が想定され、石組みの天端から深さ20cmである。この石囲い炉周辺で西側においても柱穴に関わるものも含めたピットが、今回の調査同様に群集する状態で広がる。

典型例とした竪穴建物SB-01は、建て替えの様相を示すものの、炉の作り替えの跡はない。炉を共有していたものと思われる。いずれの竪穴建物も炉を中央やや北寄りに設置し、その南西側に埋甕を埋設していた。SB-01①は、炉の中央から北側2.5m、南側3.5mを測り、SB-01②は、北側2.0m、南側3.4mをそれぞれ測る。

今回の調査で確認された竪穴建物と目されるものは、SB-01が曽利Ⅱ式期で、建物の作り替えが実施されていたと捉えられる。SB-01の東側にあるSK-02とした竪穴建物は、曽利Ⅳ式期の埋甕が出土しており、後出のものとなる。確認調査（第3区）で見つかった埋甕は、曽利Ⅱ式期で、SB-01とほぼ同時期の竪穴建物の存在が窺えるものとなっている。今回の調査対象地は、有度丘陵縁辺に展開する舌状の小丘陵内で、その端部を区切る東西方向の谷の南東部分に相当する。谷に近い場所にSB-01と確認調査での竪穴建物が展開し、谷からやや離れてSK-02の竪穴建物が次段階に構築されたことになる。第3区での所在が想定される建物からSK-02とすれば、SB-01からSB-02への移動も窺うことができる。曽利Ⅲ式期のこととなる。

谷部の段階的な埋没は、その出土土器から考えて、井戸尻段階からである。前章で2次的な底面の形成について指摘したが、谷の1段階目の埋没がそれに相当する。谷を埋めた自然環境の大きな変化の後、竪穴建物による集落が形成されるのではないかと考えられる。谷部の下層部分での出土遺物に対応する井戸尻段階の遺構は、今回の調査地点以外に展開していたことになる。

遺物としては、土器、石器が出土した。土器は井戸尻式土器から曽利式土器で縄文時代中期中葉から後半期となるが、遺構に直接関わるのは曽利Ⅱ式期から曽利Ⅳ式期で、主体的な時代構成を示す。土器は、曽利式土器を主体とした中部高地系の土器型式に北屋敷式土器などの西日本系土器が含まれる組成であった。堀ノ内A遺跡の周辺は、曽利式土器の分布域の縁辺にあたり、独自の曽利式土器を

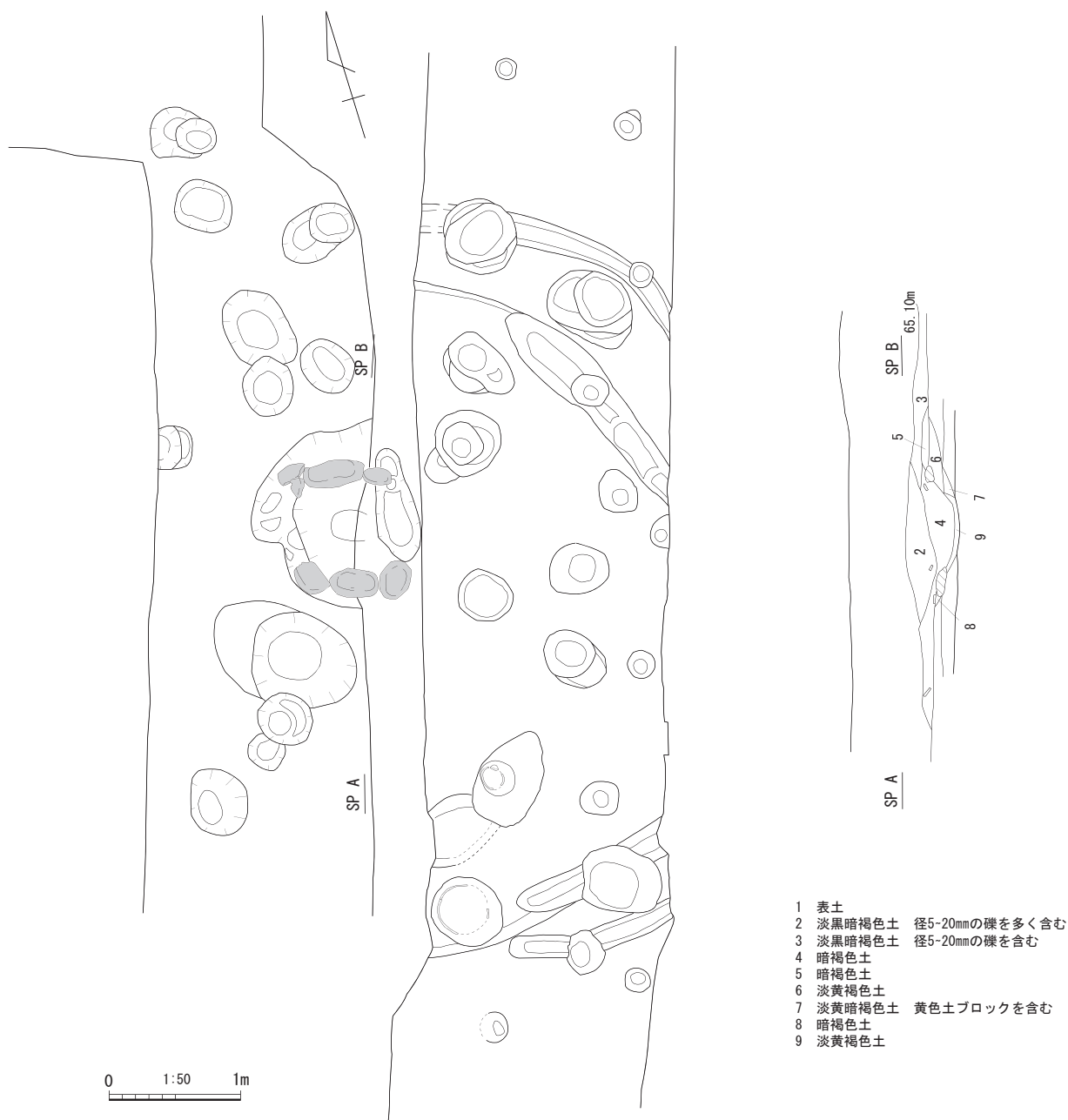
作り出し、その変容形を登場させている。遺跡の終焉は曽利Ⅴ式期で、井戸尻段階と同様に調査対象地域に当該期の集落が広がることになる。

石器については、時代的に縄文時代中期後半に限定される中で、その組成は極めて限定的、特徴的であったと言える。顕著な事例は、通常サイズの打製石斧、石鏃等が確認できなかったことにある。それは、井川の割田原遺跡や由比の阿僧遺跡などの山間地に展開する集落遺跡と大きく異なる点と言える。山間地を対象とする狩猟採集とは異なる生業であったのか、そもそも石器への依存が希薄であったのか、いずれにしても特徴的な生活様式であったことを考えなければならない。

本報告は、有度丘陵部における縄文時代の遺跡として具体的な建物跡を検出した貴重な報告であり、有度丘陵の中腹から縁辺部にかけての縄文時代遺跡の展開を想定するための事例として、大きく評価されるものと思われる。

引用・参考文献

1. 静岡市教育委員会 2023「小鹿古墳群・堀ノ内A遺跡」『ふちゅ〜No.32 令和4年度静岡市文化財年報』

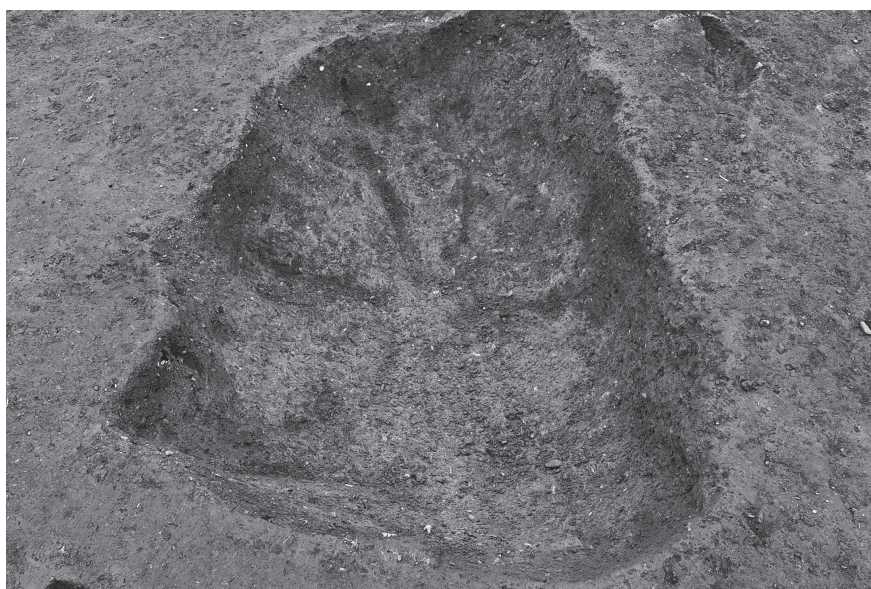


第29図 令和4・5年度調査区平面図

图版 1



1. 1区全景



2. 1区SK-01



3. 1区SK-02

図版 2



1. 1区SK-02遺物



2. 1区SK-02埋甕 No. 1



3. 2区SB-01(南から)

図版 3



1. 2区SB-01(北から)



2. 2区SB-01 P-1



3. 2区SB-01 P-1遺物 No.37

図版 4



1. 2区SB-01遺物出土状況①
(南から)



2. 2区SB-01遺物出土状況②
(東から)



3. 2区SB-01遺物① No.10, 15, 17



1. 2区SB-01遺物② No. 6



2. 2区SB-01埋甕① No.13



3. 2区SB-01埋甕② No. 5

図版 6



1. 2区SB-02(東から)

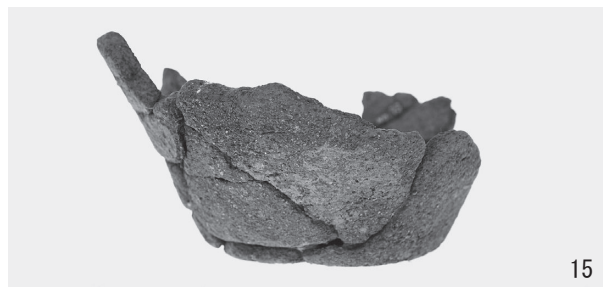


2. 2区SB-02(南から)

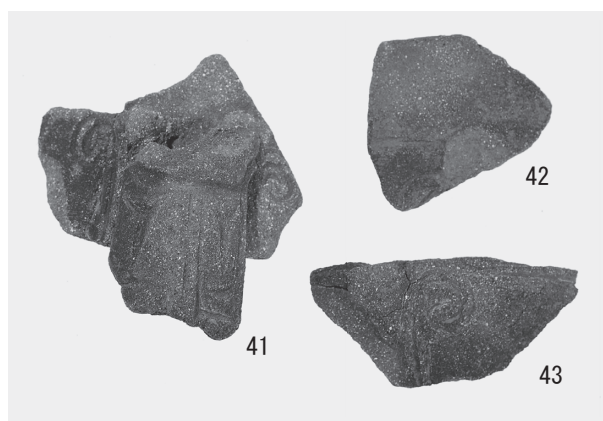
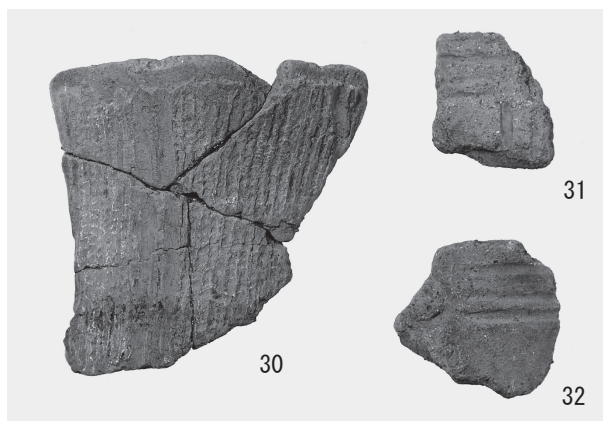
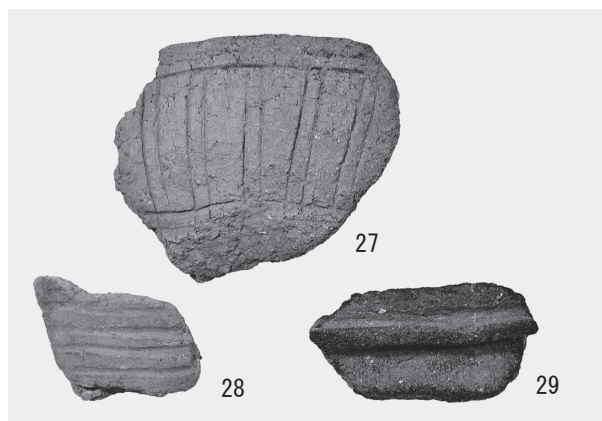
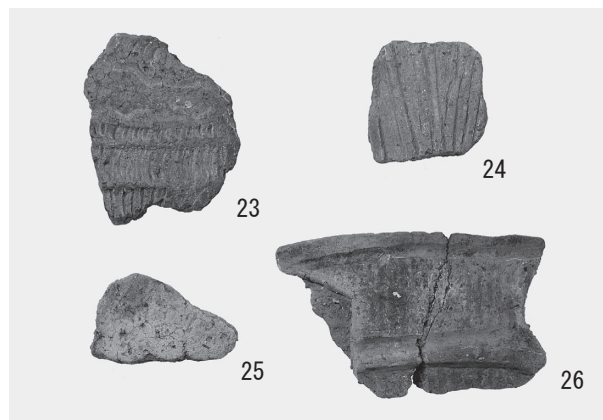


3. 2区谷部

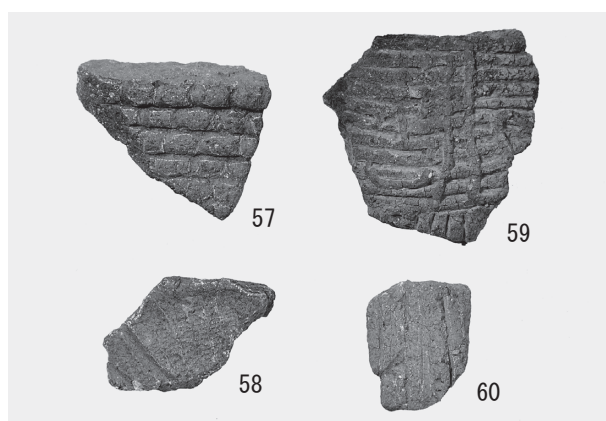
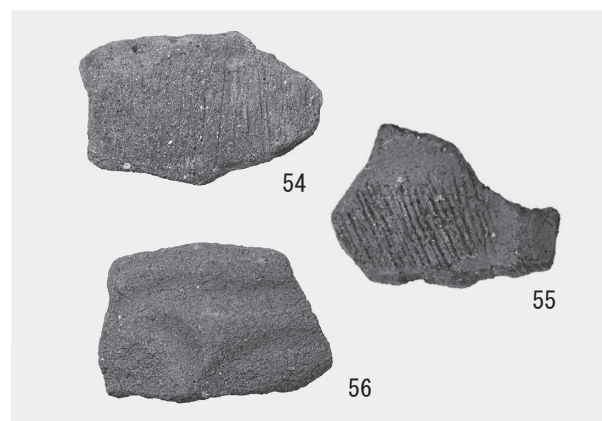
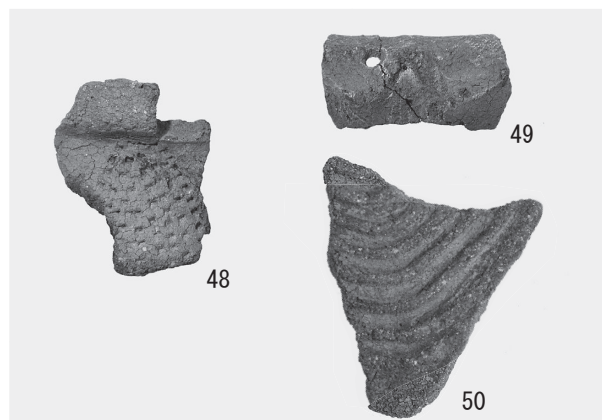
图版 7

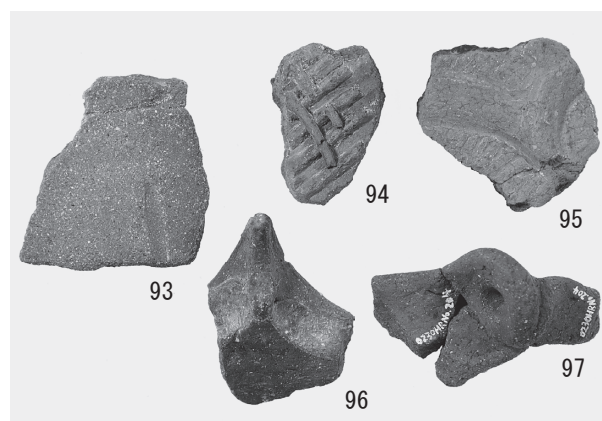
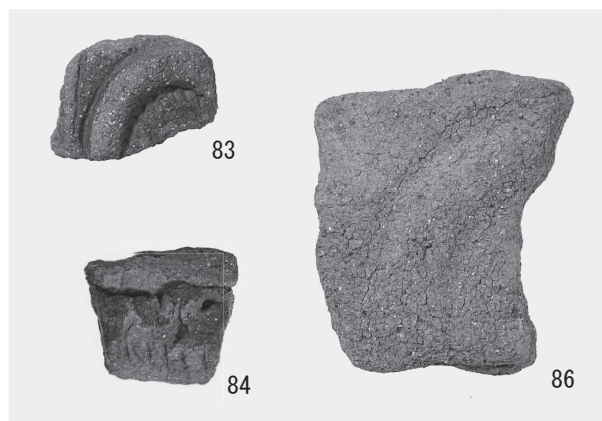
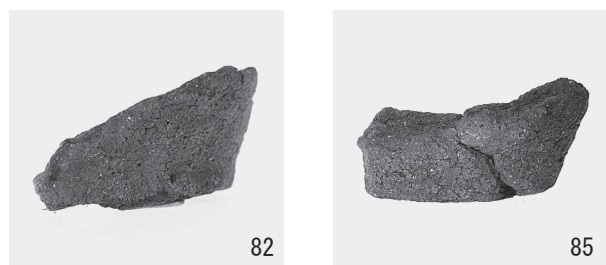
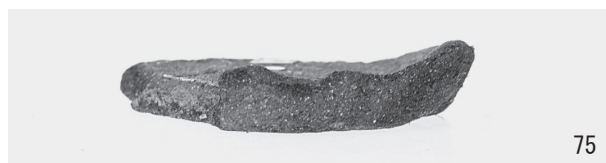
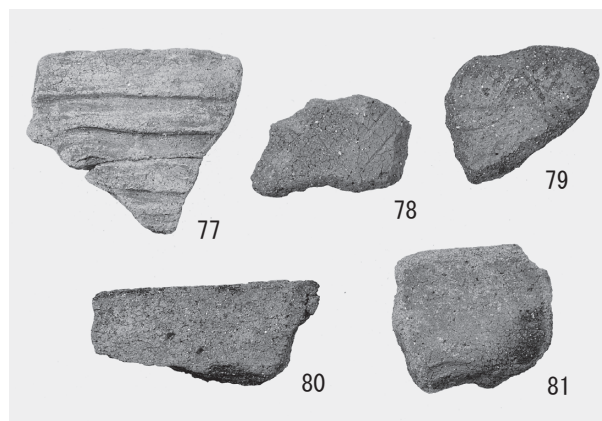
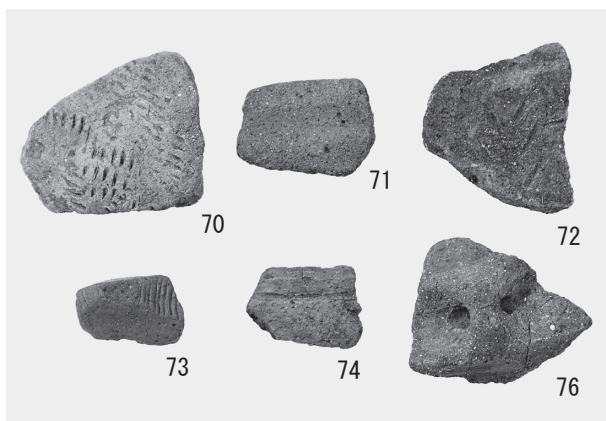
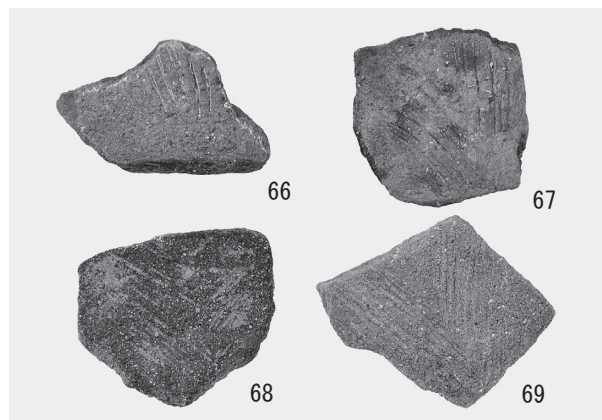
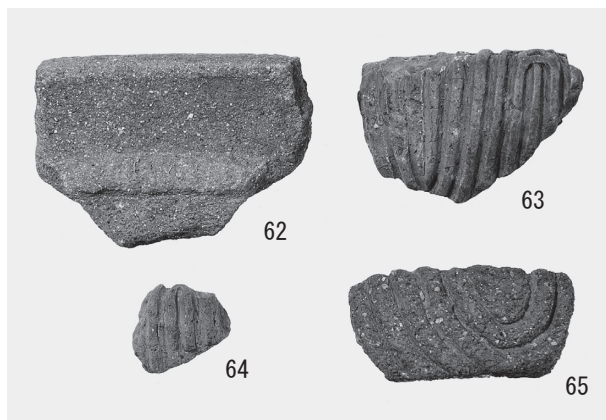


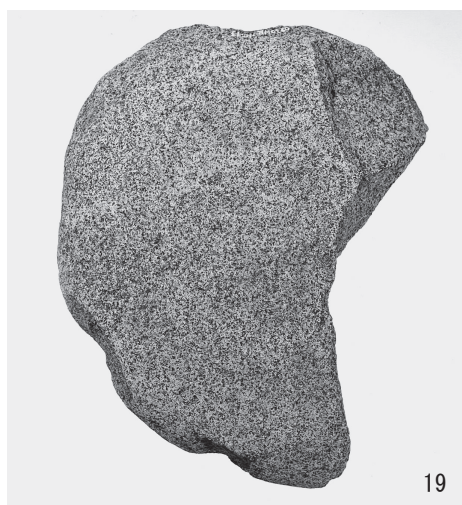
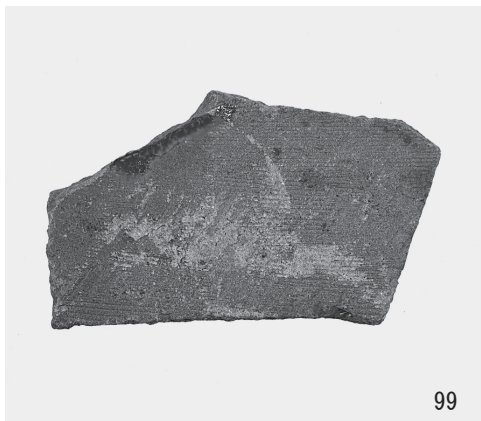




图版10







報告書抄録

ふりがな	ほりのうちえーいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書 名	堀ノ内A遺跡発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財調査報告					シリーズ番号		
編著者名	渡井英誉、菊田宗、黒澤諒							
編集機関	静岡市教育委員会							
所在地	静岡市葵区追手町5番1号							
発行年月日	2024（令和6）年9月17日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
ホリノウチエーイセキ 堀ノ内A遺跡	シズオカ シスル ガク 静岡市駿河区 オシカ 小鹿	22102	B106	34° 97' 25"	138° 42' 99"	20240131 } 20240315	125㎡	集合住宅 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
ホリノウチエーイセキ 堀ノ内A遺跡	集落跡	縄文時代 中期後半	堅穴建物3棟、土坑1基		縄文土器、石器		土器は、曾利Ⅱ式から曾利Ⅳ式が主体	
要 約	堀ノ内A遺跡は、静岡・清水平野の南側にある広大な有度丘陵の西側にある舌状台地に所在する。調査では、縄文時代中期後半の堅穴建物跡3棟、土坑1基、小穴などを検出した。また、堅穴建物に付随して、埋甕4基（深鉢土器）を確認したほか、土器・石器などが出土した。今回の調査地点は、堀ノ内A遺跡の北西端に当たるが、具体的な建物跡の発見を得て、有度丘陵の中腹から縁辺部において有力な縄文時代集落の広がりを想定できることとなった。							

堀ノ内A遺跡は、静岡・清水平野の南側にある広大な有度丘陵の西側にある舌状台地に所在する。調査では、縄文時代中期後半の堅穴建物跡3棟、土坑1基、小穴などを検出した。また、堅穴建物に付随して、埋甕4基（深鉢土器）を確認したほか、土器・石器などが出土した。今回の調査地点は、堀ノ内A遺跡の北西端に当たるが、具体的な建物跡の発見を得て、有度丘陵の中腹から縁辺部において有力な縄文時代集落の広がりを想定できることとなった。

静岡市埋蔵文化財調査報告

堀ノ内A遺跡

発掘調査報告書

発行日	2024年9月17日
編集	静岡市教育委員会
発行	静岡市教育委員会
	〒420-8602
	静岡市葵区追手町5番1号
印刷	文光堂印刷株式会社

